

稻垣陽一郎著

人生の照暗燈

完



始

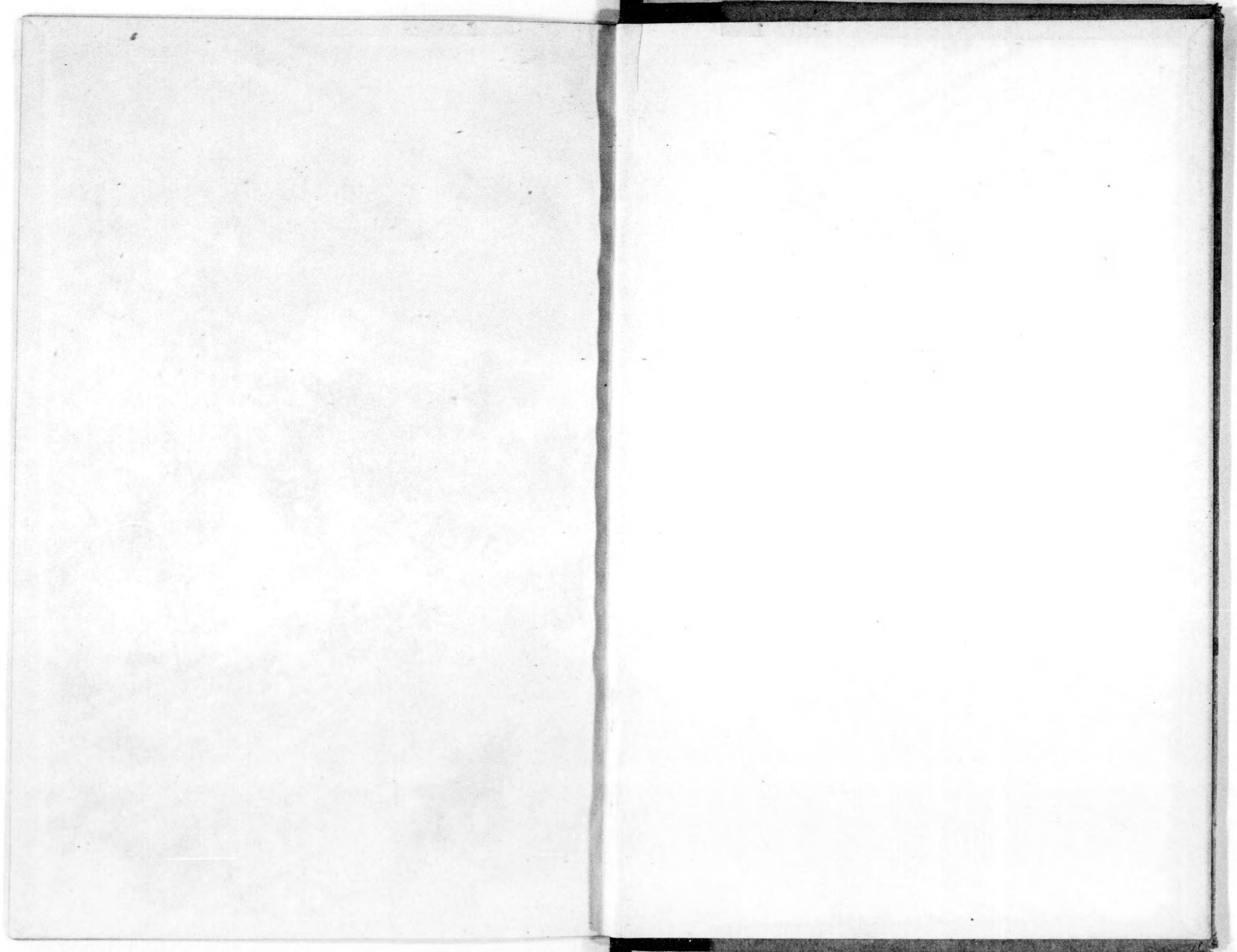


稻垣陽一郎著

人生の照暗燈

完





THE  
LIGHT OF THE CHRISTIAN LIFE

A SERIES OF TEN SERMONS

BY THE

Rev. YOICHIRO INAGAKI,  
PRIEST IN CHARGE OF SENDAI SEIKOKWAI.

---

---

Published under the Auspices of the  
Society for Promoting Christian Knowledge,  
London.

---

---

THE CHURCH PUBLISHING SOCIETY,  
(NIPPON SEIKOKWAI SHUPPANSHA).

K O B E.

1913.

THE  
CONTENTS.

A SERIES OF TEN SERMONS

- I. The Soul's Great Romance.
- II. The Light of the Christian Life.
- III. The Great Invitation.
- IV. The Christian Duties.
- V. The Temple of the Holy Spirit.
- VI. "No."
- VII. "Bethany" in Human Life.
- VIII. Sorrow and Suffering.
- IX. Godliness and Contentment.
- X. The Heaven Mansion.

小學校時代の我恩師

細井三郎先生に

恭く此冊子を献ぐ

特106  
326

仙臺聖公會長老 稻垣陽一郎 著

基督教  
處世十訓

# 人生の照暗燈

落穂集  
第三輯

日本聖公會出版社

大正  
3. 1. 13  
内交

同著者によりて

公會人物傳第一卷

牛津近代の三名士

刊既

落穂集第一輯

魂の平安

刊既

落穂集第二輯

基督教四要徳

刊既

同著者譯書

ゴア博士著

新神學と舊宗教

刊既

イリソグウチアース博士著

新三位一體の教義

刊既

ゴア博士著

聖餐論

刊近

# 序

此『落穂集』第三輯に載する所の十個の説教は、千九百二十二年中、仙臺聖公會の教壇にて述べしものにして、中には『あけぼの』に掲載せしものもあり。

表題の二重なるは、之れ『基督教處世訓』の題の下に、神、聖書、平安、義務、身體、朋友、満足、悲痛、死及死後等、人生の肝要諸問題に關して、『如何にして……』この間をおきて、主日の夜、連続的に述べし形跡を存せるが故なり。

本書若し幸に基督教通俗倫理の一斑を紹介するの  
助となりば、著者の本懐也。

千九百十三年大齋始日

仙臺聖公會にて

著者

## 目次

### 第一

### 魂の大ローマンス

——如何にして神を発見すべき乎——

- (一) △コロソバスの新世界発見 △発見の種々 △発見に伴ふローマンス △魂の神発見 △人間の神発見の切望 △発見と發明 △神を慕ふ人間の本能 一頁
- (二) △神の存在の證明の性質 △魂の神発見に伴ふローマンス △富士登山の經驗に似たり △自分自身にて発見 …… 五頁
- (三) △如何にして神を発見すべき乎 △古來の有神論證の價值 △神の自啓の必要 △イエスキリストに於ける神の自啓の絶極 △聖書の證明 △キリストの自證 △其大膽なる挑言 △キリストを知るは神を知るなり …… 七頁
- (四) △インカーチションの理由 △神の自啓の絶頂 △千古不易のキリストと其招 △キリストを信ずるは魂の神発見の成就 △キリスト教と魂の大ローマンス …… 一三頁



第二

人生の旅路の照暗燈

——如何にして人生の旅路を辿るべき乎——

- (一) △燈火の特色△人生の旅路に於ける各種の障害△人生の照暗燈としての「聖書」……………一七頁
- (二) △照暗燈は旅人に歩むべき方向と其道筋を示す△人生の「迷宮」△不正なる道案内者△悪魔の道案内……………一九頁
- (三) △照暗燈は旅人の脚下を照して障害物を避けしむ△信者の躓く場合△天を仰て足溝に陥る△弱點に乘ぜらるゝとき△巧妙なる誘惑法△聖ペテロつまづく△唯一安全の道……………二四頁
- (四) △聖書が人生の照暗燈なる所以△其由來△其權威……………三〇頁
- (五) 聖書の活用……………三一頁

第三

休安の招

——如何にして人生の重荷を卸すべき乎——

- (一) △人生遭逢の種々△人生の重荷△現實的生活と奮闘△人生の掛茶屋……………三三頁
- (二) △主は人生に勞れと重荷あるを預期し給ふ……………三六頁
- (三) △重荷を取去るその約束にあらず休安を與へんその約束△同情によりて△聖奠の恩寵によりて……………三九頁

第四

愛の適應力

——如何にして義務を果すべき乎——

- (一) △人は孤立するを得ず△種々の關係△宗教と日常生活……………四五頁
- (二) △基督教道徳の根基△十誡と其要約△基督教道徳と愛△愛の二種△キリストの「新誡」……………四七頁
- (三) △神に對する義務△(一)神を信すること△(二)神を畏るゝこと△(三)神を愛すること△(四)禮拜感謝祈禱△(五)奉仕……………五〇頁
- (四) △人に對する義務△(一)家庭に於て△(二)他人に對して△(三)國家に……………五三頁



- (三) △眞の友愛の模範△(一)無私の友としてのキリスト△(二)不易の友としてのキリスト△(三)誠實なる友としてのキリスト△(四)人格敬重の友としてのキリスト
- (四) △人生の旅路さ友△ベタニヤの姉妹

### 第八

## 人生の宿題

如何にして悲痛に處すべき乎

- (一) △悲痛の問題△基督教は如何に之を解決する乎△(二)神の攝理の下にある生活△(三)人生は天職の遂行場△(四)人格の鍛錬場
- (二) △此見地よりみたる悲痛△(一)人をして神に近かしむ△(二)罪を矯正せしむ△(三)同情を喚起せしむ

### 第九

## 敬神知足

如何にして満足安住すべき乎

- (一) △飽くことを知らざるもの
- (二) △他を羨むこと△紫の藤と知足訓
- (三) △神を敬ひて足ることを知る△知足安住は怠惰に非ず
- (四) △貪欲警戒△愚なる富人の例
- (五) △知足安住の模範△ナザレの木匠としてのキリスト△其意義(一)人をして知足安住の精神を抱かしむる爲△(二)貧乏人の友たらんが爲△(三)労働尊重の爲

### 第十

## 「父の家の第宅」

死及び死後に就て如何に考ふべき乎

- (一) △人生問題中最も嚴肅なるもの△死は不意に來る△無神論者の死△タイタニック號の悲劇△カノン、リドンの説教△死に關する不明事四ツ
- (二) △死は神より賜る安息△「父の家」に復歸

八

(三) △(二) 死後主と偕に居ること△聖パウロの言ふ所△十字架上のキリストの約束△祈禱書埋葬式の祈……………一四三頁

(四) △(三) 個性の永續△此信仰と現生△墳墓は人生の終結にあらず△人格不滅の證據△主キリストの復活……………一四六頁

(五) △(四) 身△體の復活△死後時至らば高等靈體に復活△其保證△基督教の墓地……………一五〇頁

(六) △死及死後に關する四要點△死及死後に關する解釋と現生活との關係……………一五二頁

## 目次終

### 第一

## 魂の大ローマンス

如何にして神を發見すべき乎——

未だ神を見し人あらず、惟生みたまへる獨子即ち父の懷に在る者のみ之を彰せり。

(約一〇一八)

コロムバ  
スの新世  
界發見

曾て聖路易に世界博覽會ありし時、コロムバスが長き航海の後初

めて亞米利加大陸の土を踏みし時、地に跪き、天を仰で感謝し、後には同行の水夫あり、側の木蔭には赤銅色の土人が不思議相に一行を眺めて居る大油畫を見たことがあつた。

發見の種

世に發見の種類が種々ある。物質的の發見もあれば、智力上の發見もあり又人情的の發見もある。アフリカの金剛石礦、アラスカの金礦の發見の如きは第一種のものなるべく、引力の發見や、ラジウムの發見などは第二種に屬すべく、高野山の登口に刈萱堂と稱する小き佛堂あり、往昔石童丸が其戀ひ慕ふ父を發見せし記念堂である。其他古今の小説中其最興味深き材料とする男女間の相互の發見等は第三種のもので云ひ得る。

今日迄の種々の發見の中、コロムバスの「新世界」發見はと世界の地圖と人類の歴史に變革を及ぼしたるものはなからう。コロムバスの發見は實に大なる冒險なりしと共に、又實に大なるローマンスであつた。地球は圓しとの彼の信仰と、之を嘲り之を笑ひし當時の人々の態度、之に頓着なく勇氣と確信を以て航海に出でしこと、途中の

發見に伴ふローマンス

小説的發見の神發

困難、水夫らの失望と謀反、幾度となく望むべからざるに尙望み、信すべからざるに尙信じて、遂に本望成就、今迄世界に知られざりし新世界を紹介するに至りし喜悦と感謝、是等の相錯綜する處、實に小説的である。されど之にも勝りて尙遙かに小説的にして、且つ肝要なる發見がある。之は魂の神發見である。造られし者が、其造主を發見することである。世には之に勝れる大なるローマンスはない。

「れがわくは神をたづねて何處に遇ひまつるを知り、其御坐に参り  
いたらんことを」  
(伯二三〇三)

「あゝ、神よ、鹿の溪水を慕ふが如く  
わが靈魂も爾をたひあえぐ。」

わが魂は渴けるごこくに神をしたふ、活ける神をぞ慕ふ。  
いづれのまきにか、われ神のみまへに出でん」  
(詩四二〇一一二)

之れ皆人間の神発見の切なる願望を示すものである。昔、使徒パウロが希臘のアテンスにて、路傍に「知らざる神に」と彫りつけしものを見出せしことも、或は聖アウガスチンが、「神よ、爾は爾を發見するまでは満足せざるやう人の魂を造りたまへり」と云へる有名なる語も、人間には皆此神発見のローマンスの存するを證するものである。

されど発見は發明とは違ふ。無きものは見付けることは出来ない。在る、在るに相違ないが、容易に見出すことが出来ないものを見出すのが発見である。如何に冒險的の信仰と勇氣と不屈不撓の意志ありとも、若し地球の表面に亞米利加大陸なるものが全く存在するとなしとせば、之を発見せんとしても発見の出来やう筈はない。大陸は存するに相違ないとの事を種々の點より歸納し、推察し、結論

して、一種の確信に達せしとき、コロムバスは此冒險的航海をなして遂に成効することを得たのである。  
若し此世界に神が存在しないならば、以上の如く魂が神を慕ひあえぐ情が人の固有性となる筈もなく、其情はよし常に現はれずとも或場合に堪へ難き迄に湧き出る筈もない。嬰兒が乳を求むるは、乳を與ふる、與へ得る母があるからである。人の心の神を知りたし、知るまでは満足せずとの念の存するは、偶々之れ神の存在を暗示するものである。

二

「若し神の存在は、形式的の證明を以て世に發表し得るが如きものなりとせば、神の存在の事實は其興味を失ふに相違ない。何人も異論なきことに對しては、強て之を證明せんとするものは恐らく誰も

あるまい』と劍橋大學の有名なる一學者は曾て言ふたことがある。魂の神發見に就て興味ある所以は、二と二とを合はせば、四となりと云ふが如き形式的に定まれることにあらずして、コロムバスの航海に於けるが如く、其徑路に種々の傳奇的小説的の分子があるからである。

人によりて其性情、其教育、其境遇に従ふて神發見の徑路を異にする。甲の發見法は乙の發見法と違ふ。病の場合に於てなる乎、悲に逢ひしときなるか、愛するもの、死せし際乎、將友人の誘引によりて教會にて説教をきし時なるか、將又、おのれの罪に惱みもだへしときなるか。富士山に登るに駿州御殿場口よりすると、甲州の吉田口よりすると、路は異なるが頂上劍の峰に到る目的に於ては同じことである。いづれにも自身其頂上まで登り詰めねばならぬ。然ら

三

すば本洲の最高峰よりする雄大なる景色も眺むることは出来ぬ。神發見に於ても同様である。他人を頼みて自分の代に神發見をなしてもらふことは出来ぬ。自分の神は自分自身にて發見せねばならぬ。其處に魂の大ローマンズがあるのである。

されば如何にして神を發見するを得べきか、之が問題である。之が爲にはわれら各皆一個の「コロムバス」とならねばならぬ。われらは太平洋の彼方には亞米利加大陸が横つて居るを、地理書にて學ぶのみならず、彼地への旅行者の見聞談をき、又日々新聞紙に見はれる彼地の状況報導によりて承知し居れど、それが果して如何なる土地か、其氣候は如何、其風俗は如何、其市の光景は如何等を実際に知る爲には、コロムバスに倣ふて舟に乗じ太平洋を横ざり、

近くは太平洋の沿岸の諸市、遠くはロッキーマン脈を越へて大西洋岸都市を訪ね、ばならぬ。

神發見に於けるも同様である。古より神の存在に關する種々の論議的の證明がある。或は宇宙の秩序の整齊の美よりして其意匠の經營者の神なるを知り、或は原因論よりして、萬物皆原因なくしては生ぜず、其原因の最初のもの、第一のものは如何と神に遡らんとするもの、或は道德の方面より人間の良心より推論して神の存在せざるべからざるを謂ふなどあれど、之れ恰も米國漫遊客の彼地視察談を聴くと同様である。無論之によりて彼國の事情を多少想察することは出来るが、其旅行談其視察談其ものが米國にあらざるが如く、有神論—神の存在の證明論其ものは神でない。勿論是等は神發見の旅路の案内の役に立つことは、恰も富士登山に當つて必ず同行せぬ

ばならぬ剛力の案内の如くである。されど案内者は自分と違ふ。案内者のみ登山したりとて、自分が後より従すれば、頂上に達することは出来ない。

然るに神發見に於ては、發見せんと試みたりとて、發見すべき神そのものは、形體のないものである。目にて見るを得ず、手觸るゝを得ず、さりとして耳にて聴くとも出来ない。されは神自からおのれを示したまふにあらざば、神の真相は人間には發見の仕様がなない。昔ヤコブはヤボクの渡にて神の使と角力ふて、遂に無理に其祝福をうけ、『われ顔と顔を合せて神を見まつりて尙生けるなり』と云ひしが、われらは左様なことも出来ない。

されば結局此魂の神發見なるローマンズは、不成功と失望に終るべきかど云ふに決して左様ではない。此に二千年來無數の基督信者



が實驗し來れる神發見の方法がある。此方法は唯一最終の最も確實なる方法である。

其方法とは何乎と云ふに、神自からがおのれを人間に表はしたまひしものを見ることである。それは又如何にして何時、誰によつてかど云ふに、イエス、キリストを見、見て信ずることである。

未だ神を見し人あらず、惟生みたまへる獨子すなはち父の懷に在る者のみ之を彰せり』(約一〇十六)『父を見しものはなし、唯父より來れる者のみ之を見たり』(約六〇四六)『それ道、肉體となりて、われらの間に宿れり、われら其榮を見るに實に父の生みたまへる獨子の榮にして、恩寵と眞理にて充てり』(約一〇十四)之れ聖書がイエス、キリストを以て神の眞像にて在せることを證明するものである。されば聖書は何によりて然か證明する乎と云ふに、之れはキリス

ト自身の言と其證據たる種々の教訓や、行爲によりて然か結論せるものである。

キリストは『我は途なり、眞理なり、生命也、人若し我に由らざれば父の所にゆくこと能はず、若し汝ら我を識らば我父をも識るべし、今より爾曹かれを識るなり、已に爾曹彼を見たり』(約十四〇七)と仰せられた。之は自分は神より出でし眞の神故、われを見しものは、神を見しなり、然るに汝らは既にわれらを見たり。之れ取も直さず、神を見しに異らずとの意味にてありしを、弟子の一人ピリポが其意を解せずして『主よ、我儕に父を示したまへ、然らば足れり』と反問せしに、キリストは此度は明に答へたまふた。『ピリポ、われかく久しく爾曹と偕に在りしに、未だ我を識らざる乎、我を見しものは父を見しなり、何ぞ父をわれらに示せよと言ふや。われ父に居

キリストの明白なる大膽なる挑言

り父のわれに居ることを信せざる乎。我は父に居り、父われに在ると我つげし言を信せよ、若し信せずば、我事によりて之を信すべし」(約十四〇九―十一)と。

之にも勝れるキリストの明白なる自證はない。之れ其教によりてわれの神たるを知れ、若し其にても尙信じ難くば、其事―種々の奇跡、神ならでは誰も真似し得ざる事―によりて信せよとのことである。之れ半乎として抜くべからざる自信自證の宣言たると共に、又大膽なる挑言である。

此自信と挑言は最後に死より復活せることによりて益々證明せらる。『彼は肉體に由れば、ダビデの裔より生れ、生前の靈性によれば、甦りしことによりて、明に神の子たること顯はれたり』(羅一〇三一四)と使徒の一人も言ふて居るのみならず、是等の使徒らが生命を賭

キリストを知り、神を見るに、知るべきなることを見る

インカの理由

してまでも立證をつとめしは、イエス、キリストが死より甦りしことである。『キリスト若し甦らざりしならば、われらの宣ぶる福音は空しく、汝らの信仰も空し』(哥前五〇―十四)と斷言して居る。

之によりてキリストの神より出でし神なることが識れる。確かに、且つ明に識れる。従てキリストを見、キリストを知ることには、即ち神を見、神を知ることなるを識り得る。

四

最後に、神は何故にかゝる方法を探りたまひしかどの疑問が生ずるかも知れない。

鹿は溪水を慕ひ喘ぐが如く人は其造主を知るまでは、明に知るまでは、決して安せぬと知りたまふ神は、種々の方法によりて、或は自然の裡に、或は人間の歴史によりて、或は人心に直接に訴へ、

若くはユダヤ國民と云ふ一種の選民をつくりて此に神に關する最高の思想の保育場となし、預言者、立法者らを起して、其聖旨を示し來りたまひしが、之にても尙充分ではない。神の自啓の最上、最高、最善、最後の方法は、神自から人となりて、われらの間に住みたまふにあるが故である。言ひ換れば、是以上、是以外に神がおのれを最も完全に、最も明瞭に人に示す方法はないからである。魂の神發見とは結局此キリストを見、此キリストを信すればよいのである。

之は單に理論ではない。二千年來、無數の魂は、此イエス、キリストをわが救主、わが主、わが神と信じて、愛して、仕へて、其平安と希望を得、此世にては喜ばしく住み、其臨終に當りても、此世を逝りて後は、主と偕に居るべしとの望を抱て、心靜かに世を去つた。何故に然るを得るかと云へば、キリストは神なるが故に、生きて在

す、今尙生きて在す、此イエスキリストは昨日も今日もいつまでも易らざる』からである。其生けるキリストは今尙其聖手をひろげて、われらを招きたまひつゝある。

さまよへるものよ

たちかへりて

ちなるみかみの

みまへにゆき

まことのくいをば

いひあらはせ

ひきはしらすとも

しりたまへり

さまよへるものよ

たちかへりて

十字架のうへなる

イエスをみよや

ちしほのながるゝ

みてをひろげ

いのちをうけよこ

まれきたまふ

(古今聖歌集二百七十一)

われらは此招に應じて起ち、起ちて信じ『わが主よ、わが神よ』と

仰ぎまつらば、わが魂のあえぎ慕ふ神を發見せしことゝなるのである。これぞ實にコロムバスの發見にも勝れる魂の神發見である。之れ所謂魂の大ローマンズの絶極である。基督教會は實に魂が其神を發見する場所であると共に、其發見の手引を爲し、案内を爲す所である。



## 第二

### 人生の照暗燈

——如何にして人生の旅路を辿るべき乎——

なんぢの聖言はわが足の燈火、わが路のひかりなり。

(詩篇第百十九篇一〇五節)

燈火は暗を照すものである。白晝には燈火の要はない。されば燈火は夜——暗黒を前定して居る。暗夜に旅路をたどらんとする時には、脚下を照す燈火がなければ、物に躓くかもしれない、溝に落ちるかも知れない、他人と衝突するかも知れない。加之、眞暗には足下

分明ならずば歩がはかどらない、又行先の見當も付ない。されば近世の都市の如く街燈あればよし、さる設備のなき不案内なる田舎道を歩むには、是非とも燈火が入用である。

人生は屢旅路に喩られてある。人は皆各自其の旅路をたどらねばならぬ。其道程は人によりて短かいのもあらふ、長いのもあらう。比較的安樂なるものもあれば、辛苦艱難の多いのもある。山路もあれば、谿間もある。「不自由」「不如意」と云ふ谿底に陥ることもあらう。或は「疾病」と云ふ坂路をたどらねばならぬ事もあらう。或は「艱難」と云ふ峠を越へねばならないかも知れぬ。或は「失望」「落膽」「悲愁」など、云ふもの憂き、荒れさびれたる細き野路を往かねばならないこともあらう。然かも其旅路たる自分にとりては曾て一度もわが足にて踏みしことなき路筋なれば、何時何處に、如何

なる峻坂峻路があらはれて来るかもしれない。何故となれば人の生涯は「一寸前は暗」であつて、將來に關しては何事も確かに知り得ないからである。さすれば人生の旅路は眞晝に行先の見え渡れる旅路と云ふよりも、むしろ一步も先の見えない夜の路にたどるが恰當である。然るが故にイスラエルの詩人の所謂「わが足の燈火」「わが路の光」が必要であるのである。言ひ換れば人生の旅路の照暗燈は必要となる。此照暗燈は何乎。彼の詩人は之は神の「聖言」なりと云ふ。さればわれらに與へられてある神の「聖言」とは何乎。之れ實に聖書である。聖書はわれらにとりて人生の旅路の照暗燈である。

二

照暗燈は先づ旅人に其歩むべき方向と其道筋を示す。聖書が「人生の旅路の照暗燈」として基督信者に與ふる所のものは、彼の歩む

べき方向と道筋を示すことである。曾て聖路易の世界博覽會の時、遊興所の一に『迷宮』と稱するものがあつた。戯に其内に入つた者の話によれば、入口は一なれど、内に入れば幾條かの迷路がある。いづれを選ぶべきか知れない。此にせんか、彼をとらんか、各々皆人の心を惹き人の足を誘ふ。正き道を撰ば、無事に出口に戻るとが出来るが、若し過らば屈折彷徨、ゆけども、容易に出口は見當らず大に迷はしむる仕掛である。基督信者の旅路にも此種の迷路が澤山ある。若し天國への旅路——基督信者としての主義と、道徳と、品性を保ちて渡世するところが、大道坦々、眼を閉ぢて歩むとも自から達するが如きものならば、何らの苦心も、努力も、奮闘も要しないであらう。されど實際其旅路に種々の迷路のあることは、古今の無数の聖徒の信仰物語に照らしても、又われら自身の經驗に徴しても明

である。『基督信者』と云ふ表章は、道中安全の保證とならない。受洗せりとのことは、惡魔の誘惑より免除せられたりと云ふ證明書ではない。勿論信者は世人の或者の如くに著しき犯罪、放蕩、醉酒、争鬭などの横路に殊更に入ることはないであらう。されど我らが受洗の時、神と人との前に誓ひし決心と覺悟を亂し、之より遠からんとせしむる種々の迷路がある。かゝる際にわれらの照暗燈は行先の方向を指示して曰ふ『救に入るの門は狭く、亡に至る門は廣し、用心せよ』その道は汝の歩むべき途でない』その途は横道である、それを辿りては、目的地に達することは出来ない』『脚下用心そこを注意せよ水溜がある』『向ふに丸木橋がある、傍目せず、落付て渡れ、過て落つれば下は千仞の谿、汝の身は紛碎せらるゝぞ』ど。恰も老人が漸く歩むとを習ひ初めし

幼き孫の兩手をとりて其足を導くが如く、聖書はわれらの歩を一々教へ導く。此親切なる案内者を同伴して旅路をたどらば、われらの道中は安全である。

道案内には屢不正なるものがある、之には大に注意せねばならぬ。然らずば思もよらぬ迷惑や、困難や、危険に遭遇する。漫遊旅客の往來する開港場、若くは都の大停車場などには、此種のもものが土地に不慣不案内なる旅人を餌とせんとねらつて居る。

先年伊太利のチーブル港に船が着たとき、上陸して市中の名所を見物せんとて同船者と共に一人の案内者を雇ふた。之は鑑札を持てるものであつた故、無事に目的通の見物を終へて一旦船にかへりしが、夕暮に郵便を出さんとて復一人上陸し、郵便局を探さんとて街のあちこち彷徨ふて居ると、わが様子をみて一人のチーブル人が近

寄來て、覺束なき英語にてわが爲に案内せん此方へ來よと言ふてくれたが、其様子と云ひ、其の風態と云ひ、少々怪しく險香なりと直覺的に感じたので、同行するのを辭した。今から思へば、もし其男に伴はれて往きしならば、土地慣れない外國の旅先にて、どのやうな目に逢つたかも知れない。日本にても田舎出の若き女が時々都會の大停車場や、汽船の發着場にて、悪漢に欺かれ悲惨なる經驗を爲すもの屢あるは此種の場合である。紐育の如き大都會の停車場には、此種の旅人の世話を親切になす爲に、教會の教役者たる一定の制服を着けたる婦人が居ると云ふのも之が爲である。

若しわれらの旅路に、聖書を「わが路の光」「わが脚の燈火とせず」ば、悪魔は喜んでわれらの爲に案内の勞を執らんとて控えて居る。われらの身振、われらの態度にて直ぐそれと察して、此方より頼ま

まずとも、先方より親切に申込んで来る。若し其偽親切に欺かれ、其案内をたのみて彼と同行せば、如何なる酷い目に逢ふとも致方ない。聖書にある京上りの旅人がエリコの道にて強盗に逢ひしが如きことゝなるか、或は其よりも甚き目に逢ふかもしれぬ。不案内の場所への旅には是非道案内が必要である。されど頼む以上は其道案内は正直にして、誠實に、かつ旅すべき地理を辨へしものを撰ばねばならない。われらの人生の旅路に於て、神より與へられし鑑札を有し、無数の信者が確實なりと保證せる證明書を有する唯一の案内者は、『聖書』である。

三

照暗燈は次に旅人の脚下を照らして、危険と障害を避けしむる。聖書が『人生の旅路の照暗燈』として基督信者に與ふる第二の點は

(一) 旅人の脚下を照らし、物を避ける

基督信者の躓く場  
(一) 天を仰いで足溝に陥る

信者の歩む脚下を照らして、種々の誘惑、墮落、怠慢等の危険と障害を避けしむることである。

過ぐる日、山陰道の山路にて、自轉車にて急走せし際、過て怪我せし人があつた。『脚下用心』とは昔より旅人が嶮岨なる山を登るとき、若くは谿間を涉るときに互に相戒むる言である。

旅の眼目とする所は安全に目的地に達することである。如何に急ぎしとて、若し其足躓きて仆るゝやうのとあつては、足も傷き且つ草臥れ、目的地に達することは出来なくなる。信仰の旅路に於ても同様である。信者の歩が何時如何なるときに躓く乎。

(二) 目を仰いで足溝に陥ると云ふことがあるから得意の時は危険である。萬事好都合、商賣繁昌、家内安全、爲すこと企ると皆満足に行はるゝときは、是れ皆神のわれらに賜ふ恩恵なれば、之により



て一層感恩の情をつよくし、仕主顯榮をつとむべきは當然なれど、かゝるときに心ゆるみ、思慢りて、却て神と其教會より遠からんとする恐がある。世の中に傍道する信者、掛茶屋に腰打卸して日の没るゝも氣附かず假寝する信者を屢みるは之が爲である。

(二) 弱點に乘せらるゝとき

(二) 我弱點に乘せらるゝ時躓く。或は身體と其五官より來る種々の欲望にもせよ、或は心の裡に生ずる種々の高慢、嫉妬、猜疑、短氣、虚榮心等にもせよ、われらの弱點の存する所を「誘者」は熟知つて居る。「將を射んとせば先づ馬を射よ」とは古の兵法なるが、惡魔は遠き昔エデンの園にて此兵法を採用して巧に人間の祖先を陥れた。其流義を今日にても其の子孫に施して着々功を奏して居る。店頭サムブル、ケースに飾られたる流行品は、虚榮に囚はれたる者には詭向の誘惑なることを惡魔は知つて居る。愛心乏しくして、平生より

巧なる誘惑法

快よく思ふて居らざる者にとりては、其人につき少にてもよからぬ風評の傳はるを耳にしては、今こそ積憤を晴しくれんと、其人の事を惡ざまに人々に言ひふらさんとするは、詭向の誘惑なることを惡魔はよく知つて居る。信仰冷えて神のことよりも自己を樂ましむることを先にせんとする者には、寒き日に教會に出席するを見合さんとするは詭向の誘惑なることを惡魔は知つて居る。「人をみて法を説け」と云ふ諺の出來ざりし遠き以前より惡魔は人をみて夫々巧に誘ふて來た。昔は主キリスト其弟子の内、最も元氣よく活潑なるも、氣早にして、躓き易きペテロに向つて「シモンよシモンよ、サタン汝をもどめて麥の如く篩はんどす」(路廿二〇卅一)と警告せられた。此警告ありしにも拘らず、彼は試みられしときに敗れて三度も主を否んだ。彼が晩年小亞細亞の諸邑に「散りて處れる者」に贈りし書

中に昔彼が主より受けし警告の反響を認め得る。「謹慎、儆醒、なんぢの敵なる悪魔吼ゆる獅子の如く徧行て呑むべき者を尋ね。なんぢら信仰を堅くして之れを禦げ」(彼前五〇八、九)と戒めて居る。主の警告と云ひ、また此使徒の注意と云ひ、單に昔にのみ必要なものではない。今日のわれらにも必要である。或は悪魔は誰をも畏れないかもしれない。今日のわれらにも必要である。或は悪魔は誰をも畏れないかもしれない。今日は世に悪魔の畏る、唯一のものがある。之は神の聖言である。他のすべての手段や方法に對しては彼は人に勝を制し得るかもしれない、されど彼は神の聖言に敵することは出来ない。此事は主キリストが野に於て誘惑を受けられしとき、悪魔を退けられし唯一の武器は三度とも神の聖言であつた事によつて知られる。主はパンを石とせよと挑まれしとき、「人はパンのみにて生くるもの

にあらず、唯神の口より出る凡の言に因ると録されたり』とて退け、殿の頂より身を下へ投よと挑まれしとき、「主たる爾の神を試むべからずと亦録せり』と退け、最後に悪魔をひれ伏し拜すれば天下の諸國を與へんと挑れしときも、「サタンよ退け、主たる汝の神を拜し唯之にのみ事ふべしと録されたり』と彼を撃退けたまふた。此に今日のわれらも日夜出逢す種々の誘惑に對して、之に打勝つべき方法の原則が示されてある。如何に滿地の草木を白くせし霜も東の空にさしのぼる旭日の光に逢ては消え亡せざるを得ない。アダムの子孫として罪の遺傳を有し惡に傾く人間の弱點に乗ずるならば、悪魔は時として勝を制するかも知れない。されど人はよわくとも、強き神の聖言を以て身を鎧ふときは、悪魔は如何に巧なるも斯る人を誘に陥れることは出来ない。義と潔と愛の生涯及び品性を保つべ

聖書が人  
生の照る  
燈たる所  
以

其由来

信者が屢躓き且つ仆るゝは、悪魔の強きにあらず、神の聖言を以て身を鎧ふことを怠るからである。

四

かく云へば、天下に書物の數多し若し人生の旅路の照暗燈を求めんとせば、古今の聖賢の書は何巻もあるにあらずや、然るを何の故に唯聖書のみに限らんとするやと云ふものあるかもしれない。併しながら之は外ではない。『聖書は皆神の默示にして、教誨と責督また人をして道に歸せしめ、又義を學ばしむるに益あり』(提後四〇十六)。天下の群書中其性質と其由来と其目的に於て他に比類なき書物にして『神に屬する聖人聖靈に感じて語りしもので』(彼後一〇廿一)あるからである。若し聖書は唯單に人の思想、人の説を記せるものにして止るものとせば、さる權威もなければ、又さる勢力もあるべき筈は

其權威

ない。されど之れ神の聖言なるが故に『活きて、かつ能あり、兩刃の劔よりも利く氣と魂また筋節骨髓まで刺し剖ら、心の念と志意を鑒察る』(希來四〇十二)のである。

五

されど如何に能ある聖書なりとて、之を書棚に載せおき、之を箒の抽出に片付けて置ては、さる作用は出來ない。『之を聴き、之を讀み、周到に之を學び、かつ味ひて靈魂の營養となして』こそ初めて其功力はあらはれてくるのである。提灯は柱に掛けて置きては其用を爲さぬ。『わが足の燈火』『わが路の光』とならしめんが爲には、之を點火して自分に之を提げねばならぬ。斯くしてこそ途の方向も知れば、又何處に如何なる危険あるか障害が存するかを知りて、之を避け得るのである。昔は盲人が提灯を持てあゆむをみて、ある人

之が活用

は彼に自分の眼の見えざるに、何の要ありて提灯を持ちて歩むやと問ひしに、『他人が自分に躓かぬやうに』と答へたこのことである。目の見えざる盲人すら然り。ましてキリストの教によりて心の眼の啓かれし我等は、特に此の『わが足の燈火』をよく照らして、安全に信仰の旅路をたぎらねばならぬ。



### 第三

## 休安の招

——如何にして人生の重荷を卸すべき乎——

凡て勞かれたる者重荷を負へる者はわれに來れ、われなんぢらを安息ません  
(太十一〇廿八)

人生の道  
逢の種々

此夏少く旅に出でしが、旅先にて種々見聞するところによれば、わが知れる人々のうちに於てすら種々の不幸や、悲哀や、困難や試練を身にも心にも受けて居るものが多い。

妻が重患にかゝりて、七十日近く病床にあるあり。生れて間もなき初子を喪へるものもあり。妻は病の故にとて轉地療養せるあり。

養父を失ひしと云ふもあり。突然旅先にて知人の葬式に列せりと云ふあり。産後の病に妻は弱れりと云ふもあり。女の嫁せし家は落雷の爲め數分間に全焼せりと云ふあり。兄は旅順に病臥せりと云ふあり。夫を海外に送り出して留守せるあり。

僅の時に、遠からぬ旅先に於てすら、見聞する所、實に此の如くである。是等は其種類、其程度に於て、大小深淺の別こそあれ、皆之れ所謂『人生の重荷』の一部にあらざるものはない。荷は重きも重からざるも旅は好ましからぬものである。人の一生は旅路にたとへられて居る。然かも其旅路は荷物を負へる旅である。昔、徳川家康は『人の一生は重荷を負ふて、遠きを行くが如し』と云ふた。何人も自分の旅路を自身で歩まねばならぬ。此の旅路には種々の経過がある。人は子供の時代は無邪氣に戯れ遊ぶ。少年の頃は時の經

るのも知らず面白く遊ぶ。やがて青年の頃に至れば、意識の擴大せらるゝと共に空想、理想ともに活動し來たり。美き夢をみて、可愛き理想を心に描く。此の頃よりして所謂精神的の煩悶は生ずれど、それは唯自身の心中に生ずるものにして、尙人生の實際問題に觸れない。やがて一家をつくり、身、責任ある位置に立つに及びて、種々複雑なる問題生じ來る。悲を覺え、不幸に逢ひ、試練にも會すれば、病にもかゝり。誘惑にも迫られ、困難辛苦をも嘗む。青春時代の理想や空想は、實現せらるゝこと稀にして、人生の實際的問題に逢着し來り。米國詩人の歌へるが如く

悲き調にて人生は夢幻に過ぎずと言ふ勿れ

人生は夢にあらす現實なり。

然り、奮闘努力を要する現實的の生涯なるを悟るに至る。此奮闘的

の生涯とは即ち人生の重荷を負担して堅忍することを意味する。されど重荷は重荷である。之を負担するとは容易でない。旅はくたびれるものである。兎んや重荷を負へる旅路に於ては尙更である。今こそ交通の便開けて、汽車汽船にて旅し得れど。昔の東海道若くは中仙道等を徒歩にて旅するものは、今にても山路の一角見晴らしのよき處、若くは樹蔭涼くして岩清水の湧き出る處、掛茶屋なるものありて、昔の往還の名残を止めて居るを見る。重荷を負ふて旅する人は、此に足を休ませ、此に憩を得て、復元氣新に旅を續ける。掛茶屋は旅人の重荷を取り去ることは出来ない。されど休息を與へる。人生の旅路にも此種の掛茶屋は必要あらざる乎。心の勞れたるもの、重荷を負へるもの、憩を得べき靈の掛茶屋は必要あらざる乎。

二

主は「すべて勞れたる者、重荷を負へる者はわれに來れ、われ汝らを息ません」と仰せられた。之れ人生の重荷を負へる者に對する休安の招きである。世に心の疲れたる者重荷を負へる者は數限ない。此招こそ實に人生の實際の必要に應ずるものである。此言に二の意味がある。

(一) 主の此言は、人生には「心の勞れ」と「重荷を負ふ」ことあるを豫期して居る。人は誰にも相應に試練がある。心勞がある。心配もある。主は「我に従はんと思ふものは、其の十字架を負ふて我に従へ」と仰せられたるは實に意味ふかき言葉である。されば我らは身に負へる重荷や、心の勞れを全く取りたまはんことを願ひ得ないかもしれない。それは基督教の人生觀よりすれば、人生は品性の鍛錬所又は一の學校と見るからである。此に種々の課程ありて、訓練せ

らる。「悲哀」と云ふ讀本もあれば、「不幸艱難」と云ふ書方もある。「疾病」と稱する算術もある。

是等は是非人生と云ふ學校に於て、何人も學ばざるを得ざるものである。されば人情よりせば不幸よりも幸福、疾病よりも壯健、艱難よりも安樂を望むは自然なりとするも、神は其賢明なる知見によりて、我らの身上に生ずる事、一として知りたまはざることなしとせば。而し其神は全智全愛にして、我らの弱點も、我らの要するものも一々知りたまふとせば。われらは是等の「心の勞れ」其等の「重荷」を取り給へと祈り願ふは、卑怯となる。之は男らしく忍ばねばならぬ。如何となれば、是等のものは、決して無意義に我らに與へらるゝものでないからである。之れ我らをして自省せしめ、警戒せしめ、或は之れによりて自分の弱きを悟りて、一層神に依り頼むに

至らしむる乎、若くは自分の傲慢を去りて、一層謙卑ならしむる乎、何か意味あるに相違ないからである。其意味は或は直ぐ知れないかもしれない。されど後に知れる、いつか知れる。若し此世にて知られずば、必ず後の世にて知れるに相違ない。

此點に於て、主の模範は我らの爲に獎勵となると共に、又慰藉ともなる。十字架は初より主の覺悟し給ひし所なりとは云へ、主にとりては随分苦き戦にてありしに相違ない。されど主は「もし聖旨に適はば此杯をわれより取り去りたまへ、されどわが意のまゝを爲さんとするにあらず、聖旨に任したまへ」と祈り給ふた。われらの人生の重荷に對する態度も正に斯くあらねばならない。

三

(二)かく主の招の聖言は人生の重荷と心勞を皆無にせんと約束に

（二）重荷  
を全くとる  
去るに取  
約するの  
ら休む安  
の與ふこ  
約束

同情によ  
りて

はあらざるも、心の勞れたる者又重荷を負へる者を休ませんどの福音である。かりに心勞と重荷は基督信者のみならず、普ねく此の世に生ける者の等しく受くる運命なりとするも、尙信者が他の者と異なる一の特權は、重荷を負ひ、此心勞を有しながらも、尙之を休め得ることである。此世の旅路に掛茶屋を有することである。此に憩ふて疲をやすめ、新なる活力を得て、旅路をついけ得る。されば主は如何にして、これら人生の重荷を負へる旅人を慰めたまふやと云ふに

一 同情を以ていある。『われらの荏弱を體恤こと能はざる祭司の長はわれらにあらす』（來四〇十五）『かれ自ら誘はれて艱難を受けたれば誘はるゝ者を助け得る也』（來二〇十八）之れ實にわれらの救主の貴き所以である。同情を最も切に表はし得るものは、同一の事情、

四〇

恩寵によ  
りて

同一の境遇にある者である。主は此世の生涯に於て、あらゆる悲哀と艱難、試練と誘惑とを嘗めたまひたれば、人生の行路に疲れたる旅人を、眞に體恤り得たまふのである。我らは人生の旅路に苦みなやひととき、他の何人も我らに同情を表する者なしとするも、此救主は最も切に我らに同情し給ふことを忘れてはならない。

二 聖奠の恩寵による。主は又教會の祭壇に於て、其尊き體と血をパンと葡萄酒の形に於て、我らの靈の糧として與へたまふ。聖餐式に於ける程、我らが近接に主に見え得る機會は外にない。又これは我らの慰となり力となることも外にはない。我らは何處にても、何時にても、主に近より得ないとはない。されど聖餐は主がわれらに近づき、我らを招きたまふ欽定の機會と方法である。われらの信仰生涯が進めば進むほど、此事は痛切に感ずるやうになつて來る、聖



餐に陪し度思ふやうになつて来る。聖餐が慕はしくなつて来る。殊に淋しき旅先にて、知る人もなき處にありては、聖餐に来るは此上なき慰となる。此に来りて主に親しく交り、親しく其肉體と血をうく、其うれしさも楽しさは、主を信じて主の體の肢とせられし者のみ受け得る特權である。

或人々は聖餐式とは、單にキリストの十字架の死の記念祭に過ぎざるが如くに考へて居る。されど其以上である。之れ一方に於て、教會が神の前にさへげ得る最上の犠牲であると共。又之れ主が特に現臨して、我らに會ひ給ふ機會である。さればこそ之は教會の當初より主要の禮拜式なりしと共、又信者の最も慕ふ禮拜式である理由である。そは此に主は我らの靈の糧を備へ給ふからである。かく主は聖餐に於て、われらの重荷を休め、われらの心の勞れを

癒したまふ。我ら人生の行旅に疲れ、其重荷を堪へ難く感ずるとき主イエスの生涯を想ふて、我らの救主も曾て、此世にいませしとき、此の種の心勞を自ら嘗め給ひし故、われらに切に同情したまふ。我らひとり心勞するにあらず、主も我らの心勞を分ち給ふと知るとき、こよなき慰藉を覺ゆる。そは天下に誰一人もわが心事を憐むものなしとの念はど人をして心細く感せるものなしとせば。一人にても我ら心事を眞に諒解するものありとの念は、我らをして苦勞の間にも尙勇を鼓して起たしむるものあるからである。通常の人の同情にても然り。况んや愛も同情も全き主イエスより之を與へらるゝに於てをや。

されど我らは唯かく消極的に自ら慰むるのみでない。更に又積極的に主の約束したまへる主の肉と血を聖餐に於て受け、之によりて

養はれ、強められ、潔められ、勵まされて、新元氣、新活力を得、再び人生の行路を續けることが出来る。昔イスラエルの人民が、カナンへの途中、曠野にてマナを與へられたる如く、聖餐は人生の旅に於ける生命のマナである。

人生に重荷がある。基督信者となりしとて、此重荷は取去られるわけではない。されど重荷はありとも、尙かくの如くにして、人生の旅をつづけ、遂にシオンにて主に見ゆることが出来る。



### 第四

## 愛の適應力

——如何にして義務を果すべき乎——

爾ころを盡くし精神を盡くし意志を盡くし主なる汝の神を愛すべし、これ第一にして大なる誠命也。第二も亦之に同じ己の如く爾の隣を愛すべし。凡の律法と預言者は此の二の誠命によれり(太廿二〇三八、三九)

人は孤立して居らぬ、孤立することは許されない。人は一旦此世に生れ來れる以上は種々の方面に關係を生ずる。此の關係は又種々の義務を生せしむる。

其關係の中、根本的なるは神との關係である。我らは神を離れて

人は孤立  
するを得

種々の  
關係の關

生存し得ない。又最も直接に關係あるものは家族である。われらは此に生れ、此に育ち、此に生く。次に家庭以外のものとの關係がある。即ち人に對する義務がある。更に又おのれ及び家庭の存在する社會—國家との關係より生ずる義務もある。人は此世に生れ來れる以上は、到底以上の關係を脱するとは出來ぬ。従て以上の關係より生ずる義務を免がるゝことも出來ない。されば如何にして此義務を果すべき乎。之を果すに於てわれらの標準とすべきものありや。

宗教は倫理ではない。されど苟も宗教にして、人生と生ける交渉を有するものたる以上は、道德的ならざるを得ない。唯葬式の場合にのみ要する宗教、唯祭事の時にのみ用に立つが如き宗教は、何等人生と直接交渉を有しない。従つてわれらの日常の生活に無關係で

ある。斯の如き宗教は、倫理的たるを得ない。倫理的ならざる宗教は我らに要する好當なる處世訓を提供することは出來ない。何故となれば、處世訓は當然其内に義務に關する教訓を含まねばならぬいからである。

われらは基督教を以て最上の倫理的宗教と信じて居る。又主張して居る。従つて基督教は最も緊切に我らの日常生活と交渉を有する宗教である。之れ基督教が人間の義務に關して大に教ふる所ある所以である。此に考へんとするは即ち此點である。

二

基督教道徳の根基を爲すものは十誠である。之は昔神がイスラエル人に與へ給ひしものにて、神に對して爲すべきこと、人に對して爲すべきことを教へたものである。

後主キリスト教を爲すに當りて、之を二誡の中に簡約せられた。即ち「汝心を盡し、精神を盡し、意志を盡して、主なる汝の神を愛すべし、是れ第一にして大なる誠なり。第二も亦之に同じ、おのれの如く汝の隣を愛すべし、凡の律法と預言は此二の誠によれり」と。人間の義務は實に神を愛し、人を愛すとの此言の中に簡約せられてある。若し此事を忠實に行ふを得ば、あらゆる義務は皆満足に果たし得る。キリストは又他の場合に「われ汝等を愛するが如く爾曹も亦互に愛すべし是れわが誠なり」(約十五〇十二)と仰せられた。使徒ヨハネは此教を承けて「神を愛するものは、亦其兄弟をも愛すべし」と誠めて居る。されば基督教道徳の根本思想は此愛の一語の中に含蓄すと云ふとが出来来る。従つてあらゆる人間の義務も此「愛」を以て果すことが出来る。

「愛」なる文字は日本にも昔より用ゐられて来た。其意味は直に基督教の所謂「愛」に該當するや否や確でない。聖書には二種の愛なる文字がある。(一)は感情よりする熱せる愛情にして、愛するが故に愛するにて、其の理由を敢て問はざるもの。之れは人情自然よりする骨肉、親子、夫婦、戀人、友人等の情愛である。(二)は前者に比すれば、遙かに平靜なる分別の伴ひたる愛情にして、自分の愛する對象に於いて、愛するに足るべき優秀の美點若くは徳を認むるものにして、尊敬に基ける友愛の如きは其れである。前者は人情自然に流露するものにして、後者は相當に理性の判断を伴へるものである。キリストが「新誠」(約十三〇三四)として教へたまひし「愛」は第二種のものである。「人其の友の爲に生命を捐つ之より大なる愛はなし」(約十五〇十三)と言はれしも此第二種のものである。聖ヨハネ

の教へし「愛」も亦同様である。さりとして愛に二種類はない。愛は本質上一なるが、其發現の動機若くは状態に於て相違を生ずる。されば基督教にて云ふ愛なるものは、通常日本人が聯想するが如き人情自然の愛にあらずして、理性の平靜なる判断と相當の理由によりて愛するものにて、子に甘き母が盲目的に愛すると稍意味を異にすることを念頭に存しをかねばならない。

三

されば此「愛」を以てわれらの義務に應用するときは如何。

第一に來るものは神に對する義務である。神に對して、われらは如何に爲すべきや。公會問答は之に對して、極めて明確なる答を提供する。

「神に對してわが爲すべきことは(一)神を信じ、(二)神を畏れ、(三)心

を盡くし、精神を盡し、意志をつくし、力を竭して神を愛し、(四)又禮拜、感謝、祈禱を捧げ、一心に依り頼み、(五)其聖名と聖言をうやまひ、生涯忠實に服事ると是也」と凡そ五ヶ條である(祈禱書二〇八頁)。(一)神を信すること。之は當然のとの如く思はるれど、或場合には、本人は氣付かないかはしらねど、神を信じて居ないことがある。或は信することが難い場合がある。身に不幸、災難、疾病等の相次いで到るが如きときである。かゝる場合神を疑はんとする。「何故にわが身にのみ斯くなる乎」と不安を懷くことがある。「天道是非乎」と無神論者は言ふが、信者も神の存在を疑はずとも、其愛、其保護を疑はんとすることは少なくない。神を信することは斯る場合に神に對する義務である。

(二)神を畏ること。不正、不義、不潔、不正直等は、皆神を畏れ

ず。神の臨在に對し偽盲目となるより來たる罪である。「空意張」  
 「虚勢を張る」之れ似而非勇氣である。神を畏るゝ人にして、初め  
 て何物をも畏れざるを得る。神を恐るゝ人は、良心の責なく、俯仰  
 天地に恥ぢざる故、人を畏るゝ必要もない。  
 神を畏るとは、神に相當する恭敬を捧ぐることを意味す。恭ふべき  
 ものに對して、恭ふとをせざるもの、若くは之を知らざるものは、  
 其人の品性の高尚ならざるを示すものである。

(三) 全力全心を盡して神を愛すること。「汝等先づ神の國と其義と  
 を求めよ」と主は仰せられた。「先づ」は此文句中高調せられたる點  
 である。何故に單に神の國云々と言はれずして「先づ」なる字を挿  
 まれし乎。「先づ」とは注意の向けらるゝ第一點を示す。注意集注の  
 第一點は愛の何よりの證據である。

(三) 神を  
 愛するこ

何事よりも先づ神のことを思ふ。朝起きて聖書よりも先きに新聞  
 紙をみるは、神の事を第一に心に置いて居る證據とは思れない。人に  
 挨拶するより先に、神に挨拶(祈禱)せぬものも、神の事を第一  
 に思ふて居る證據とならぬ。「忘れる」「等閑に附する」「氣付かずに居  
 た」など、申譯せられては、人も喜ぶまい。愛の冷やし第一證を此  
 に認むるからである。少くとも自分のことが其人の心の第一點を占  
 めて居ないことを示すからである。人情は機微である。些細の事が  
 大なることゝなる。人情に於て然り、神に關しても同様である。神  
 はわれらの第一愛を要求する權を有したまふ。そは我らは萬事を神  
 に負ふて居るからである。われらの生命を初めとして、生活上の必  
 要物若くは慰樂等、一として神の恩賜ならざるはない。さればわれ  
 らは當然先づ神を愛せねばならない。

(四) 禮拜  
感謝祈禱

(五) 奉仕

(四) 其表證として神に捧げまつるは、禮拜感謝祈禱にして、之によりて「一心に依り頼」めることを現はさねばならぬ。  
(五) 又生涯忠實に神の僕として奉仕することを怠つてはならない。教會に對して忠實を盡すことは、神を愛するより當然生じ來るべき奉仕である。

人に對する義務

四

第二に來る人に對する義務は如何。  
之も別に難いことはない。神に對する同じ愛が人に對して働くに過ぎない。神を愛するの愛あらば、人を愛せざるを得ざることも、神は目にみえぬ。目にみえぬ神を愛せんには、目にみゆる人を愛せねばならないとは、使徒ヨハネの論法である。「既に見所の兄弟を愛せずして、未だ見ざる神をいかに愛せんや、神を愛すと言ひて、

其兄弟を憎むものは、是れ誑者なり」(約壹四〇廿、廿一)。故に神を愛する以上は當然人―隣人を愛せねばならぬ。此處に隣人に對する義務が存する。

(一) 家庭  
に於て

(二) 他人  
に對して

此「隣人」の中には、少なくとも三の方面―範圍が含まれて居る。  
(一) 最も近きは家庭である。第一に兩親がある。「汝の父母を敬へ」之は勿論のことである。世に理想的の孝子ありとせば、そは理想的基督信者(かゝる言は好ましからねど、悲きとには信者の名ありて實なき者ある故致方はない)である。神を信じ神を愛する者は然らざるを得ない。従つて夫妻、兄弟、主僕としても理想的のものとなる。  
(二) 次に他人に對しては如何。「汝ら人に爲られんと思ふことは人にもその如くせよ」「おのれの如く汝の隣人を愛すべし」之れ人に對する基督敎道德の立場である。「人を見れば盜人と思へ」と言ふと何

たる相違ぞ。親切、同情、慈悲、寛容等は、皆他人との關係上生ずる徳にして、基督教的愛なる幹より咲き出でたる花である。

（三）國家に對しては如何。「上に在て權を掌る者には、凡て人々服ふべし、蓋神より出でざる權なく凡そ有る所の權は、神の立てたまふ所なればなり」（羅十三〇一）「われ殊に勸む萬人のために願告、祈禱、懇求、感謝せよ、王および凡て權威をもてる者の爲にわけて之を行ふべし」（提前二〇一）。之は聖パウロの勸告である。聖ペテロも亦「汝曹主の爲に凡て人の立つる所の者に從へ、或は上にある王、或は惡を行ふ者を罰し、善を行ふ者を賞むる爲に王より遣はされたる方伯に從ふべし」（彼前二〇三十四）とすゝめて居る。

かりに聖書の中に主權者に忠順を盡すべしとの此種の勸告は一語も見ずとするも、もし愛國忠義なるものは口舌上の事ならば即ち止

む、苟も之れ何事をか意味するものなりとせば、最上の意味に於ける愛國家忠臣は、敬神愛隣の基督信徒其人でなければならぬ。彼の從ふ愛の法則は然らざるを得ざらしむるのである。

紙製の軍艦は役に立たぬ。口先のみの愛國者にて、行に伴はざるものも、之と同様である。愛國者とは軍時にのみ生ずるものではない、天下に有事の日とては常にあるのではない。われらの解する處によれば、最上の市民となるは最上の愛國者たる所以である。而もわれらの信ずる所によれば、基督信者こそ最上の市民である。然らざるを得ない。

若し基督教―若くは基督信者を捉て此點に於て、些かにても誣ゆるが如きとあらば、之れ晴天を指て雨天なりと云ひ、鷲を目して鳥なりとするの類である。昔も斯る愚論を吐きしものがあつた。聖ア



ウガスチンが、此の輩に向て辨駁せし左の言は、今日之を讀んでも  
尙痛快を覺ゆる。

「何人にて、イエス、キリストの教義は、國家の安寧に反する  
ものと思ふものをして、此教義を信奉する軍人若くは官吏の中より  
此種ものを指摘せしめよ。此教義を信奉する執政官、夫、妻、兩  
親、小供、主人、僕婢、帝王、裁判官、若くは納税期日を過たず、  
又之を徵收するに正直なる者より、此種ものを指摘せしめよ。然  
る後に基督教は國家に有害なりと断定せしめよ。或は寧ろ彼をして  
進んで此教義にして正當に信奉せらるゝときは、國家の大保障とな  
ることを認識せしめよ」と。

右は初代の辨證なれども、今日尙基督教對國家の關係を誤解せる  
もの尠からざれば、今にても尙其の功力を失はない。されど若し教

會が何を爲しつゝあるか、又爲さんと勉めつゝあるかを明瞭に諒解  
する者は、基督教が國家に有害なるは愚か、國家の爲に實に有功有  
益にして、大に之が爲に盡瘁しつゝあることを感謝するであらう。

倫理上より教會を見るときは、此は一種の人心改善、人格變更の  
機關にして、社會改良の根本的事業を爲しつゝあるものである。そ  
は社會は人によつて作らるゝものなれば、社會の改善、延て國家の  
實力養成は、先其人民を改善するに存するからである。故に教會は  
一の大なる道德教師にして、又道義の維持者、又國家の勢力を銷沈  
せしむる惡弊の矯正者として、國家に對して最も有力なる補助を與  
ふるものである。よし此事は屢看過せられありとするも、若し一旦  
教會と其活動が、社會より退き去るときは、初めて其功蹟を明に認  
めらるゝであらう。

六〇  
先頃内務省の催に係る三教會同のありしが如きは、政府が此點に於て聊か氣附きしことを證するものである。

五

義務を教へ、且つ之を如何にして果すべきかを教ふることは、如何なる處世訓にも見逃すべからざる要點である。基督教が此點に於て教ふる所は略以上の如くである。  
要するに基督教道徳の根本點は、「愛」である。此原則は種々の方面に應用せられて、人をして充分に其義務を果さしめ、個人としても、家庭に於ても、社會に於ても、國家に對しても、理想的の人間とならしむる。

第五

「聖靈の殿」

——如何に身體を取扱ふべき乎——

「爾曹の身は爾曹が神より受けたる爾曹の裏にある聖靈の殿なり」  
(哥前六〇十九)

「爾曹は神の殿にして、神の靈なんちの中に在すことを知らざる乎」  
(哥前三〇十六)

人格と身體

元來人間は靈と身體を有て居る。此身體は人格の主要部分である。されば人と云ふときは、其人の靈の外に身體を含んで居る。宗教にて云ふ救は、勿論主として靈に關することは真である。されど身體も人格の主要部分なる以上は、之をも其中に含めるものにあらずば

完全なる宗教と云ふことは出来ない。言換へれば、宗教は人格の全體を取扱ふものでなければならぬ。

されば從來宗教は身體を如何に取扱ひ來りたるかと云ふに、之には概ね二種ある。一は身體を輕んじ、他は之を尊重する。身體を以て全然罪惡の源なりとする宗教は、之を輕んじて大切にしない。昔のストイクの教などは此類である。或は之を懲治する。昔の極端なる禁慾主義、若は佛敎の或宗派の難行苦行なども多く此類である。之に反して基督教は、大に身體の尊嚴を教へるものである。

基督教は多くの在來のものに新光明を投じ、新光榮を附せるが如く、身體に於ても同様である。從來輕蔑せられ、疎略にせられ居たる身體に、新尊嚴を與へた。如何にして然るか。之には四の理由がある。

(一) 身體は神の創造し給ひしもの故、尊しとすること。

聖書の開卷第一章に曰ふ『神其像の如くに人を創造たまへり、即ち神の像の如くに之を創造、之を男と女に創造たまへり』(創二〇二七)と。

アントワープの大聖堂にルベンの筆に成つた主の屍を十字架より卸す名畫がある。單に此種の名畫は其國の國寶なるのみならず、實に世界美術上の寶である。其の値幾何か知れない。何故にしか尊きか。之れを描きし畫家が世界有數の畫伯であるからである。一枚の畫にても然り。然るに人間の身體は如何。假に之を一の製作品と見ると、之はと精密にして且つ巧妙なるもの他にあるべきや。研究すれば研究するほど、其不思議さがあらはれて來る。今日廿世紀の誇とする科學の力を以てするも、到底之を製り出すことは出来ない。

この身體は、  
インスピ  
リションの  
機具たりし  
故

今後にも出來ないに相違ない。かく身體は其如何にして作られしか知  
らずとも、製作上の技巧よりするも比類なく尊い。然かも其造主は  
神自身なりと云ふに至つては、尙更に尊くなる。之は神の聖手の業  
である。人間の造りしものにてもそれ相當に尊いとすれば、神の業  
に成れるものに對して、我らは充分に尊重せねばならない。  
(二)基督教の根本教義は神の完全なる自啓である。其完全なる自啓  
は如何にして成りしやと言ふに、神が肉體となり人となりたまへる  
ことである。然かも其の人となりたまふにあたりて、人間の身體を  
採りたまふた。神がおのれを人間に自啓したまふにあたりて、幽靈  
の如くに現はれたまはず、又天使の如くにせず、人間の身體をとり  
て、イエス、キリストの身體に於て己を示したまひしことは、大に注  
意すべきである。

# 欠

# 欠

確信より  
する主義  
の變更

い。人は時として自家の確信よりして、其主義と立場を一變すると  
がある。之は卑怯ではない。却て一種の勇氣を示すと、なる。たと  
へば、十九世紀の中葉、英國教會にありて、公會主義復興運動の首  
領たりしニューマンが、其後羅馬教會に轉籍せしが如きはそれである。  
之を見て、彼を變節者、裏切者と罵りしものありし時、眞摯正直、  
深き省察と、長き祈禱と、尠なからざる苦悶を経て、強き決心を以  
て之を斷行せし彼が、泣いて辨解の筆を執つたのは、有名なる「アポ  
ロギヤ」と題せる彼の信仰歷程記である。確信によりて爲す所は、  
假令同意する能はず、賛成する能はざる場合にても、われらは其勇  
氣―男らしき勇氣を賞むる。降るか、降らぬか、陰暗不定の天候よ  
りも、雷鳴閃電ありども、驟雨沛然として降るは快い。人の行動に  
於けるも同様である。世にいやしむべきは、「張子の虎の頸」生涯で

ある。之は「否」と云ふべき時に、「否」と言ふ勇氣なきものである。キリストの生涯は、此點に於てわれらに模範を與ふ。群衆彼を擁して、王とせんとした時も之を避けたまふた。之自身にとりては或は好都合ならんも、神の聖旨に背くことである故である。されど後にピラトの審判廷に立ちて「爾は王なる乎」と問はれしとき、此度は事自家の立場に關すれば生命を賭して、明白に「爾の言へるが如く我は王なり、われこれが爲に生れ、これが爲に世に臨れり、蓋眞理に就て證を爲さんため也」(約十八〇三七)と答へたまふた。之實に「然」を「然り」とし、「否」を「否」とする好模範である。

(二)「否」はまた品性と關係がある。われらが通常崇むる品性にも種々の型がある。聖徒型、温厚の君子型、強剛型等である。第一型のものは、秋天一碧の如く、第二型のものは、春月朦朧に湖面に映ず

るが如く、第三型は千波萬波を受けて、之を粉碎する磯邊の巖の如くである。われらは斯る高品の人物の前には、自から首を垂て敬意を表するに至る。されど此中其感化と勢力に於て、最も強くかつ大なるは屢第三型の人である。此種の人には敵が生ずるかも知れない。何故となれば、自家の最善と信ずる所は、人の面を恐れず、人の反對に怖ぢず、世の誹謗を心に介せず、侃々諤々として其所信を發表するからである。言ひ換れば「否」と云ひ得る人であるからである。如何なる種類の社會若くは議會にありても、此種の人は「鹽」である、防腐劑である、警鐘である。たとへば今の英國教會に於ける牛津の監督ゴア博士の如き其一人である。

されども唯妄に高言大語、人の意に逆ふは何の賞する所かあるべき。學識、力量、品性の臺地ありて然るが故に、強くかつ大なるを得る

のである。神の忠僕として大に役に立つは、古より此種の人に多い。  
 『基督教は何時の世にても不人望である。好評を受くるが如きこと  
 あらば其結果は思ひやられる』とカノン、ニユーボルトは云ふた。若  
 し基督教にして然りとせば、基督信者も同様なるに相違ない。強ひ  
 て不人望たらんとするのではない。主義あり、節操あり、正義に興  
 みして立たんとするが故である。基督信者より『否』を取り去らば  
 『地の鹽』は其味を失へるものとなるであらう。

三

『否』は又消極的には、誘惑に對しても言はねばならぬ。誘惑は内  
 外兩面より来る。故に『否』も外より来るものに對して言ふと共に、  
 又内より迫るものに對しても言はねばならぬ。  
 誘惑は到る處に在る。人は全く之を避くることは出来ぬ。若し外

より來らずば、内より迫る。無垢無罪の主キリストすら誘はれ給へ  
 るにても知れる。之は單に誘惑せられることは罪でない證據である。  
 聖人すら思ひもよらぬ夢を見ることがある。罪は誘に同意するとき  
 初めて形成せらる。強て危険に近くは愚である。されど妄に危険を  
 恐れて進まざるは卑怯である。愚と怯とは相近い。好んで誘はれず  
 ともよい。されど誘惑を恐れては何事をも爲し得ない。要は惡に誘  
 はるゝときは、『否』と答へて之に應せざることである。之が爲には  
 平生の心掛が必要である。

古の武家の女は懷劍を身につけて居た。萬一の場合の自衛の爲で  
 ある。基督信者の誘惑に對する武器は、『否』である。  
 (一) 聖書の中には『否』と云ひ損ねて、三度主を知らずと云ひし弟子  
 のことが記されてある(路廿二〇五四―六二)。されど又埃及の宮殿の

過去の経験に勝る誘惑に抵抗する力

奥部屋にて、身を覆すべき誘惑に對して、『否』と叫んで逃げ出せし清節の好青年のことも記されてある(創三九〇十一—十二)。前者は誘に敗れ、後者は美事に勝た。墮落の第一歩は『否』と言ひ損ねることである。救済所に收容せられ居るあはれむべき婦人は、多くは『否』と言ひ損ねし結果である。セキスピアの句に「男子が己を持する嚴ならずは、婦人は墮落する」とある。婦人に關する罪には、男子が其責任の大部分を負はねばならぬかも知れない。されど『否』と言ひ得ざりし婦人も、其責を分たねばならぬ。一度言ひ損ねては、次に言ひ切ることは一層難くなる。一步を許すは、百歩を許すと、ななる。一度偽を言はば、其偽を取消す爲に、更に新なる偽を言はねばならなくなる。されど一度思ひ切つて『否』と云ふときは、二度目には、前の経験あれば、此度は一層力つよく言ひ切り易い。過去の

誘惑に品性毎に強固なる

勝利の経験は、新しき戦に於ける力と勇氣の源となる。少年ダビデが、巨人ゴリアテを仆せしときもかくあつた。彼は曾て牧羊の際、迫り來りし猛獸を空拳を以て打ち殺し得た。神は自分を助けたまへば、此の割禮なきペリシテ人如何に怪力ありとも、何ぞ畏るゝに足らんや。曩に自分を助けたまひし神は、此度も助けたまふに相違なしと信じて起ち、投石によりて、美事に彼を仆した(母前十七〇三七、四九)。誘惑に對して『否』と言ふ毎に、其人の品性は一段強くなることは、コンクリートの庭をつくるに、一槌毎に堅くなると同様である。カノン、ニューボルトの忠告の眞味は此に存する。『傀儡師佛出さうと鬼を出さうと』ロンドンの如き大都會は傀儡師の如くである。如何なる誘惑が、何處に、如何にして潜めるか知れない。紐育にて日本の青年の墮落せる悲惨なる物語を屢々耳にする。



ロングフェローのアルプス登山の青年の歌は、外來の誘惑に對する  
警歌である。而かも此歌の要點は『否』である。

(二)されど誘は外より來るのみならず、内よりも迫る。内より迫るものは、外より來るものよりも一層つよく、從て其争闘一層激烈なるとが多い。古の支那の賢者は、山中の賊は平げ易く、心中の賊は平げ難しと言ふた。聖パウロの内的苦闘は、此種の内的苦闘の經驗の最高點に達せるものである。其言に曰く『われ願ふ所の善は之を行はず、反て願はざる所の惡は之を行へり……われ内なる人に就ては神の律法を樂めども、わが肢體に他の法あつて、我心の法と戦ひ、我を擄にして、我肢體の中にをる罪の法に従はずもを悟れり。噫われ困苦人なる哉。この死の體よりわれを救はん者は誰ぞや』(羅七〇十九、二二―二四)。

人、聖なれば聖なるほど、又聖ならんとつとむれば、つとむるほど、此内部の闘は益つよく激くなり來る。而も此戦は畢竟する『否』と言はん乎、言はざらん乎との闘に外ならない。外より襲ひ來る敵を仆すのみが勇者ではない。内の敵を仆すには、更に大なる勇氣―道徳的の勇氣を要する。『冬の大將、春の弱卒』との句がある。外敵には克ちても、内敵に敗れ易しとの意も此句に含まれて居る。日露戦争に戦功あるものは、金鷄勳章を賜はつた。靈的の勝利者は、其名天の冊に記さる。

主キリストは野の試誘に於ての誘惑に『否』を以つて打ち勝ちたまふた。石をパンとせよと試みられしときも『否』。殿の頂上より投げよと試られしときも『否』。惡魔を跪伏し拜せよと試みられしときも『否』。『否』―神の聖旨に忠順ならんが爲に、自意自欲を棄つる

此有力なる「否」に對しては、流石の「試なる者」も、其手段を施すに由なくして、遂に退くの已むを得ざるに至つた(太四〇一一十一)。此にも我等の學ぶべき好模範がある。

四

基督教は「否」と言ふべき所に、「否」と言はしむる宗教である。之れ古より不人望なる所以である。基督教者の生活は、忠實に之を送らんとせば、決して容易き生涯ではない。何故に教會史上のペーシを玉の如く飾る光榮ある殉教者は生じたる乎。之れ「否」と言ひしが故である。若し「否」と言ふべき所に、「否」と云ひ得ざるはどならば、初めより基督教者とならぬが善ひかも知れぬ。熱くもあらず、冷くもなき生温き信者は、主の公會の榮とはならぬ。

第七

人生のベタニヤ

——如何にして友愛を保つべき乎——

「それマルタ其妹およびラザロはイエスの愛する所のものなり」

(約十一〇五)

山聳ゆる處、水其麓を繞ぐり、花匂ふ所、蝶此に集る。夏の日に喬木に鳴く蟬の聲、秋の夜に千草にすだく虫の音、いづれも友其友を呼び、慕ふものが、其慕ふものに應ふるの聲にあらざるはない。自然物すでに然り。さればこそ神は初め人を造りたまひしとき、「人ひとり居るはよからず、われ彼の爲に助者を與へん」と言ひたまふ

たのである。

世に孤獨に堪へ得るものは、『天の神と野の獸』なりと云へど、其天の神も單獨にて在さず、其内部に、父と子と聖靈の三位ありて、永遠の昔より交通を保ちたまひ、野の獸すら友を呼ぶことを思ふとき。友愛の必要を今更此に説くには及ばない。唯問題は、如何にして此友愛を得、若くは與へ、かつ之を續くべきかにある。

されど之を考ふる前に、先づ眞の友愛は如何なるものなるかを明らかにするを要する。

二

(一) 先づ眞の友愛は、無私アンセルフヒシネスでなければならぬ。無私とは自己の事よりも友のことを先づ考ふることであり、自分

眞の友愛  
の特徴  
(一) 無私

が友よりかくせられたいと思ふよりも、自分の方より先づ然か其の友に爲すことである。『おのれ人に爲られんと思ふことは、人にもその如くせよ』との基督教倫理の大原則は、友愛にも適用せらるべきである。

愛とは與ふることである。思を與へ、時間を與へ、努力を與へ、生命すら與ふ。『人その友の爲に生命を捐つ、之より大なる愛はなし』。求めやうとすれば、決して満足あるためしはない。人が友に對して不満を抱くは、求むるより生じ、友に對して怨を抱くは、『あの人は自分に斯くしてくれる筈であるにと』考ふるときにある。若し與へて居れば、さる不満や怨は起らない。勿論愛は常に交換的―相互的のものである。與へしだけ人は求めんとする。求めて得ざるが爲に失望もし、不平も抱く。されどかくては眞の友愛を結ぶとは難い。

結ばれても永く續かない。求むる所なくして、與へ其の結果自から之に酬はれてこそ、初めて友愛の美き果と稱すべけれ。初より與へられんことを望むは、永續すべき友愛の必須要件の第一のものを缺いて居る。

人は友人より手紙が来ないとして、怨み、又立腹する。されば自分が其人に手紙を書いたかど云へば書いて居ない。人は友人が自分に就て冷淡なりとてつぶやく。さればとて自分は其友人の爲に、聖餐若くは朝夕のいのりの時に一度も祈つて居ない。我儘は永續すべき友愛には禁物である。増長ことは美き友愛を殺す黴菌である。友愛の冷却には自己中心が其主要の原因と爲つて居る。わが望むたよりを友人より欲しと思へば、先づ、此方より其友人に音信すべきである。自分の爲に友人の祈を欲しいと思はば、先づ自分が其人のこ

とを我がいのりに覺ゆべきである。友を得るの途は、先づおのれ友たるにある。友たることをつとむるにある。

(二)次に眞の友愛は不變でなければならぬ。よき友は人生に必要なるが、かゝる友は不易の友、いつまで易はらず友情を保つ友でなければならぬ。一時の友は時と場合によりて尠ならず出来る。されど其等の友愛は又時と場合によりて止んでしまふ。われら今日迄各多少の友情を結んだに相違ない。されど其内今迄依然として尠續て居るもの幾何かある。學窓の友、職業上の同僚は、其時限にて斷絶せるものが多い。是等は便宜上、境遇上自から生ぜる友なる故、又便宜上境遇上の變化と共に止んでしまふ。眞の友情とは心と心、人格と人格との交なるが故に、其人の主義、境遇、事情、職業、地位の變化に超然として、始終一貫せるものでなければならぬ。

去るもの疎しと云ふ。之は友情は場所の制限に壓服せられたのである。斯るものは眞の友情と稱することは出来ない。

(三) 誠實も亦眞の友情に必要な條件である。

誠實は人格の飾らざる本相の發露せるものである。口上のみの友、愛想のみの友は、眞にわが事を念頭に置いて居るものでない。眞に頼になる友ではない。萬事好都合、順風に帆をあげて、順潮に人生の『船』を遣るときは、同乗しくるゝとも。一旦暴風起り、わが『船』沈まんばかりとなりて、最も助を要するときには、同乗してくれない。喜ぶときに、喜びられるとも、悲む時に共に悲んでくれない。悲の時には最も友ほしき時である。誠實の友は、利害得喪を離れて、眞にわが身のことを思ふてくれるものである。假令世を擧つて、自分に敵するとも、彼のみはわが味方となりくれる。假令世を擧つて

自分を誤解するとも、彼のみはわが身を信じてくれる。

世には政事上の意見よりすれば、全く敵と味方なると拘らず、私交に於ては、實に外の見る目にも美しき友情を結べるものもある。類を以て集るは、物の道理なるも、若し誠實あらば、異類のもの、間にも、不易の友情は成り立つ。

(四) 尊敬も眞の友情の要素の一である。

聖書に言ふ所の『愛』とは、人格に對する分別ある尊敬に基いて居ることは、前に話した。友の人格に對する尊敬―其友の或長所或美點を認めて之を尊敬することがなければ友情は續かない。馴れると云ふことは、如何に親友の間柄にても禁物である。之は我儘を増長する素因となり、延いて友情を短命に終らしむる。尊敬があれば互に扣目にする。我儘を言はぬやう謹む。從て不平

不満を感じぬ。人にせられんことを求むるよりも、先づ自己を顧るに至る。美しき友情、不易の友情には、必ず此尊敬の要素を含んで居る。

されど尊敬と云ふも、單に友の長所美點を認むるのみにては足りない。實に其人の靈を尊重するものでなければならぬ。此靈は不朽のものである。友愛が單に肉の上に存する間は、肉體の變化と共に友愛も變化するを免がれぬ。如何に美しく、如何に健全なりとも、肉はやがて衰へ、遂に朽つべきものである。「クオ、ヴァデス」の作者が、其主人公ピテニアスの口を藉りて言ひし所は眞である。

『われの彼を愛するは、其不朽の靈を愛するのである。かくして互に相愛す。かるゝ愛は別離をも知らず、不貞も、變心も、老衰も、死をも知らない。よし青春と其美は過ぎさるとも、わが身は枯朽

して死がわれらに觸るゝとも、愛は尙生きのこる。そは靈は永く生くるからである。』

友—眞の友と云へども、尙人間である。若し其友愛が此靈に觸れず、此靈を尊敬するより發せざるときは、不足と不満を免がれない。果樹には空花と稱するものがある。花は美しくとも、果は結ばない。友愛を結ぶはどならば、墳墓の彼方にまでも之を續けよ。

## 三

以上はわが身の經驗よりせる、眞の友愛に必要な條件の二三である。されど、『此れだけのことならば、何も特別に教へられずとも諒解せり。さる友情は理想的ならんも、實際果してあり得べき乎。さる模範はありや』と言ふものあるかも知れない。之に對する我が答は主キリストの例をみよと言ふにある。

主キリストは萬事に於て、人間の模範なるが如く、友としても、我らにわれらの踐むべき友道の善き例を残された。聖書をみるとエルサレムより數哩を距れたる所に、ベタニヤと云へる小邑ありけるが、こゝにマルタ、マリヤの姉妹と其弟のラザロと云ふが住んで居た。此の家族のものと主キリストと親き間柄であつたことは、其弟子のヨハネが、「それマルタと其妹及びラザロは、イエスの愛する所の者なり」(約十一〇五)と記して居るにても知れる。然るに其ラザロは病みて死せし時、キリストは弟子に告げて「我儕の友ラザロ寝ねたり我かれを醒さん爲に往くべし」と云はれた。ラザロのことを「友」と呼び給ふた。之によりて、キリストの地上生涯に於ける友情の一端を窺ふことが出来る。

福音書のキリストに關する記事をみるに、以上列擧する友愛の特

色は、完全にキリストによつて發揮せられあるを見る。

(一)キリストは友として無私むしの友であつた。常に己のおのれことを忘れて、人のことを念ひ、私わたくしを棄て、他の便利べんりを圖はかられた。其最も著しき例は、主の生涯の最後に近きて、ケデロンの路の夜半に、敵が捕手を遣はして、主を捕へんとせしとき、此危急存亡きふそんけうの際にも、從容として迫らざりしキリストは、敵に向つて「われすでに爾曹なんぢらに我は其なりと云へり。若し我を尋ぬるならば、此輩を容して去らしめよ」(約十八〇八)とて、伴へる弟子の安全を圖られた。常に人は自分の都合、自分の勝手を思ひ易い。危急の場合に於ては尙更である。然るにキリストはかゝる場合に先づ弟子の身の上を案せられた。之は十字架かじやうにて母君の安全をはかりて、その後事を、愛せる弟子に托せられしと同一の精神より出でしものなるが。今日の如き自己中心

思想の熾んなる時代には、尙更に此點を學ぶべきである。

(二)キリストは友として不易の友であつた。キリストは友を愛したまふた。愛したまひしものは、終に至る迄之を愛したまふた。『世にありしおのれの民を既に愛し、終に至る迄之を愛せり』(約一三〇一)。一旦其十二弟子を撰びたまふや、何事の生ずるありとも、決して其愛を易へ給はなかつた。如何に愛せし友も、一朝己に敵し、己を忘るゝに至らば、わが友愛も之と同時に止まんとするは、人生の常事である。忘恩背愛の徒を尙友として遇せんとするは、常人にとりては苦痛である。時事非にして、月色悲しむケデロンの夜、其愛せし弟子の一人、敵に内應するありて、己れを捕へんとて、兵士を率ゐて來るを見ては、世に是れに勝れる友愛の悲痛なる打撃はあるまい。然かも主の愛は是にて止みたりし乎。否、温言彼に告げて曰ふ『友

よ、何の爲に來るや』。眞の不易の友愛の原則は、此の一語の中にこもつて居る。ユダの偽の友愛は、偶主キリストの不變の愛を證したるに過ぎなかつた。

主を愛するに於て、最も強き告白をなせるペテロが、其舌の根、尙未だ乾かざるに、三度主を否んだ。是れ常友の堪へ得る處でない。然かも之によりて主の愛は止みし乎。否、否、夜更けたり祭司の長の庭、鶏二度鳴くや『イエス顧みてペテロを見たまへり』。此の一顧の中に眞の友愛の甘露がある。

之によりて、我らはキリストの友愛の教義は、一たび友たりしものは、何時までも友たりと云ふとにあるを知り得る。ユダの裏切も、ペテロの拒も、尙其友愛を絶つことは出来なかつた。若し友愛にして破れ、又止むことありとせば、それは眞の友愛にてなかつたので



(三) 誠實の友として  
キリスト

ある。「曾て一度は愛せし事ありと夢るものは、一度も愛せざりしものなり」と或詩人は歌ふて居る。

(三) キリストは友としては誠實の友であつた。百匹の中、一匹の羊若し迷ひなば其九十九をおきても、亡はれしものを探ね出す誠實を有て居られた。さればこそ世間の不評判を買ひ、又非難を受くるが如きことありども、決して之が爲に其友愛を變じ、若くは之を愧ぢ、若くは之を棄つるが如きことをし給はなかつた。彼は税吏罪人妓女の友なりと罵られつゝも、尙罪を悔ひし一人の女が、價貴きナルドの香油を惜げもなく主の頭にそゝぎしをみて、弟子の中甚しく憤りしものありしに拘らず、主を饗應せし主人の接待にも勝りて遙かに多く之を嘆賞せられ、あつたまさへ「天の下いづくにても、此福音の宣傳へらるゝ所には、此婦の爲し事も紀念の爲に言ひ傳へらるべし」

(四) 人格  
敬重の友として  
キリスト

(太二六〇一四) とほめ給ふた。人前を繕ふやうな友情にては、斯ることは出来ない。

(四) キリストは友としては、人格を尊敬する友であつた。賢き人、大なる人物、位置の高き人、富める人、好評ある人、美貌の人を友とするは、虚榮の心を満すことゝなるかも知れない。されど世より擯斥せられ、輕蔑せられたる者を友とすることは容易でない。之は神の像を存する人の人格を眞に尊重せねば出来ない。キリストは實にかくの如き友であつた。ザイカイや、マグダラのマリヤや、税吏マタイ等皆かくの如くして、キリストの知遇を蒙つた。

四

以上略、眞の友愛の特質と、其實際に行はれたる模範を明かにし得たりと信ずる。

友情は人世の寶である。家に何らの財物なくとも、若し不易にして無私に、誠實にして信任する友愛をもてる人は、眞に富める有福なる人である。人は斯る友を欲しがらる。されどかゝる友は容易にならぬ。或格好の石を欲しいと思ふて河原に出てみよ。石は無數であるが、わが欲するが如き石は容易に尋ね得られない。眞の友は神の賜物である。よき賜物である。

されど若し之を容易に發見し得られずとも、われらは主イエス、キリストを、極めて敬虔なる意味に於て、わが友——わが不易、眞實の『友』として有することが出来る。

基督信者は實に人生の旅路に最も要する無上の『友』として、キリストを有して居るものである。『それマルタと其妹其兄弟ラザロはイエスの愛する所の者なり』とは、人生の旅路に行き暮れて、旅のさ

びしさを覺ゆる人の心に如何になつかしく響くぞ。されど此キリストの友情はベタニヤの姉弟のみ所有せし特權なりや。否、否。今にても主を信じて、主に従ひ、主を愛するものには、何人にも昔に劣らず友となり給ふのである。そはキリストは今尙生きて聖靈によりて、われらに臨み給ふからである。

たふさきわがさも エスキリストは

つみさがうれひを さりさりたまふ

こころのなげきを つまますのべて

なごかはるるさぬ おへるおもにを

たふさきわがさも 耶蘇キリストの

ふかきいつくしみ さほにかはらす

よのさものわれを すてさるるときも

いのりにこたへて

いたはりたまはん。

(古今聖歌集三百九十)

キリストをわが人生の旅路の『友』とする。是れ基督教處生訓のである。



### 第八

## 人生の宿題

如何に人生の悲痛に處すべき乎

「われは我に力を與ふる主イエス、キリストによりて、凡てのこゝを爲し得るなり」 (腓四〇十二)

「神は我儕が諸般の患難の中にわれらを慰めたまふ、是れ我らをして、神の我らを慰めたまふ安慰を以て、又もろくの患難に居るものを慰むるこゝを得しめんが爲なり」 (哥後一〇四)

### 悲痛の間

人生の宿題の一は悲痛の問題である、世に悲の種盡さず、眼に涙の乾くひまがない。心に生ずるあらゆる失望、さては生別死別の嘆身の疾病、不意の怪我、或は天變地異より生ずる諸の災害など、舉

基督教は如何に解決する乎

一〇〇  
げて數ふることは出來ない。之れ何人も逃れ得ざるものである。男には男の苦勞、女には女の心勞あり。此世に信仰生活を送る基督教者には、誰にも、相應の十字架がある。何故に、何の爲に世に悲痛存するや。之は等閑に附し去るにはあまりに緊切なる問題である。之を解し得ざるが爲に悲觀し、厭世して、自暴自棄となり、亂行、放縱、酒によりて僅かに悶を遣らんとするもの、又は絶望的に仕方ないどあきらめるものもある。何とか解決をつけねばならぬ。糸のもつれたるは心地よきものでない。不可解の宿題ありては、眞の快心の生涯を送り得ない。満足、希望、快活、勇氣、喜悅、餘裕等は、人生の此問題に對する相當の解決を保てるものにあらずば得難い。されば如何にして之れを解決する乎。之れは處世訓と大に關係がある。如何なる處世訓も、必ず其中に此問題を容れねばならない。

神の下の生活に接する

勿論右の問題の中には、哲學の範圍に入るべき大問題もあれど、根本的解決は是非とも宗教によらねばならぬ。されば基督教は此問題を如何に解決する乎。之が爲には、先づ基督教人生觀の基本的見地を明にせねばならぬ。(一)基督教は人生を以て、神の攝理の下にある生活と爲す。詳しく言へば智に於ても全く、力に於ても全く、愛に於ても全く「大人格者」が人類全體としてのみならず、我らを(イ)一々知り、(ロ)一々掛念し、(ハ)一々愛し、(ニ)一々守護し給ふことを教へる。之はキリストの山上の説教に於て、縷々説明せられたる所にして「羽の雀も故なくして空より落ちず、野の百合花は勞めず紡ぐことなくして美しき色を呈し、われらの頭の髪も皆神によりて數へらるゝことによりて示さる。従て神はわが爲に常に最善を爲したまふに相

違ない。さればわが心と身に迫り来る悲痛ありども、之が爲に困惑し、失望し、落膽し、此世に若し神在さば、而て其神は若し愛ならば、何故に悲痛を除き去りたまはざる。何故に此世を樂園と爲したまはざる。此世に悲痛の存するは、神の愛と矛盾せずや。之れ此世に神存せざる乎、若くは神は愛ならざるの証ならずやなど嘆き、怨み、迷ふの要はない。

よし自分の見る所よりすれば、かりに我身に迫る悲痛の意味が判然悟られざるが如き場合ありとするも、後には明となる。加之、神は其聖旨を遂行するに永遠の時を有したまへば、よし人間は短見にして唯目前のことより彼是打算推測して、當惑することありども、悲痛の秘義が此生涯で充分解せられずとも、後の世には必ず明となるに相違ない。

(二) 基督教は人生を以て天職の遂行場と爲す。聖書にみゆる著しき思想の一は『召さるゝ』—神に召さるゝ、このことである。われらは皆神より召されて、各相應に爲すべき天職を神の聖旨に従ふて授けられてゐる。『兄弟よ、各々召されし時に在りし所の分に止りて、神と偕に居るべし』(哥前七〇二四)と聖パウロの勧め居るも此意味である。

されば、人よりみて如何なる卑賤なる位置も、神の前には尊榮あるものに劣らず高貴である。人一人は神の前に尊い、そは人は皆神の像に似せて造られたる者であるからである。王侯も匹夫も、貴婦人も下婢も、單に人としての威嚴に於ては神の前に差異はない。

(三) 基督教は人生を以て、人格の鍛錬場と爲す。人生は品性試練の學校である、懲治の鍛錬に充ちて居る。人に尊ぶ所は其品性である。

人物判定の基督教的標準は、何を爲せし乎と云ふよりも、『如何なる人乎』と云ふことにある。其志す所如何、其望む所如何、其好む所如何等は、其人が神の前に如何に見ゆるかを決定するものである。されば其品性は如何にして成るかは、セキスピアの云へるが如く『七度鍛られて銀は純となる』。高美なる品性の成就する爲には、鍛錬を要する。人生の試錬は此品性を陶冶するものである。

されば人生に悲痛ありとするも、既に人生は飲食睡眠の遊興所にあらずして、尊き不朽の人格の鍛錬所なりとせば、之を以て神より送られたるわが品性鍛錬の機會若くは器具なりとし、テニソンの歌へるが如く『古き自我を踏臺として新しき自我に上りゆく』べきである。聖パウロの所謂『艱難は忍耐を生じ、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生じ、希望は羞を來らせざるを知る』(羅五〇三)と云ふも

此意味である。彼は雷に之を教へしのみならず、自から之を實行せしことは『多くの忍耐にも、患難にも、窮貧にも、困苦にも、責打にも、獄に入るにも、搔亂の時にも、勤勞にも、睡らざるにも、食らざるにも、貞潔と、知識と恒忍と仁慈と聖靈と偽なきの愛と、眞の道と神の能と左右に在るところの義の武具を用ひ、また榮耀、羞辱、惡名、合間に由りて己の義を人に顯はせり』(哥後六〇四―八)と云ふて居るにても知れる。

二

されば人生に對する右の基本的見地より悲痛を見るときは如何。春爛熳の花の色はいつまでも續かず、やがて秋風立ち、木の葉黄みてのちに冬は來る。必ず來る。之れは避くることは出來ない。王侯の身にも寒氣迫れば、匹夫の家にも北風吹き入る。されど寒き冬

以上の見  
地より悲  
痛の意

はよし誰の身邊にも迫るとも、若し相當防塞の用意あらば、あながち惶て怖れるには及ばない。世に悲痛は存する。基督教は之を除き去るものでない。されど之に對して、相當の解釋を提供する。此解釋を以てするとき、われらが人生に於て會する悲痛は、種々の點に於て却て裨益となり教訓となる。

(一) 悲痛はわれらをして神に近かしむ。『悲哀は神が我らをして、其友たらしめんとするの招待状なり』と云つたものがあるが、其意味は深長である。『困つたときの神頼み』との俗諺は人間の心事の真相を曝露せるものである。得意の時幸福の時に、神を忘れ、神に遠かり居るものも、悲痛に會ひては自から神に來る。昔のイスラヘルの詩人も『悲にあひたりしは我によりき事なりき、これに由りてわれ神の律法を學び得たり』と云つて居る。悲哀は神に接近する途の一で

ある。

(二) 悲痛は罪を矯正せしむる。

罪とは人間の自然の意志が神の意に反逆を企てることである。從て神意と人意の調和は破れ終る。不調和は何にても幸福圓滿なる状態ではない。現今の有名なる一英國神學者は『若し世に罪なかりせば、世に悲痛なるものなかりしならん』と云ふて居る。罪と悲痛とは同一物でない。されど罪は如何なる種類のものにてても、其酬としては、相當の悲痛を齎らす。肉體の罪は疾患を呼び、精神上の罪―傲慢若くは虚榮心は耻辱をもたらし、殘忍は卑怯とならしむ。されど悲痛其ものは必ずしも罪でない。悲痛は罪を全く除き去らずとも、之が矯正を爲す。悲痛は悔悟を生せしむ。悔悟の涙によりて品性は淨化せらる。濱の小石は水に浸され居る間は美しい。されど手にと

りあげて乾けば、さほどにもなき普通の色となる。  
 人間の心も悔悟の涙に濡れて居る間は清浄である。ペテロは三たび主キリストを否みて容易ならぬ罪を犯したれど、一旦其非を悟りては、痛悔の涙せき止め得なかつた。彼は此悲痛によりて、主に仕ふる忠誠を一層深くした。  
 ダビデの場合に於けるも亦同様である。

あゝ神よ、わがはくば、爾の仁慈によりて我をあはれみ、  
 なんぢの憐憫の多きによりて我もろくの愆を消し給へ、  
 わが不義をこそごまくらひさり  
 われをわが罪よりきよめたまへ  
 われはわが咎をしろ  
 わが罪はつれにわが前にあり (詩五十一篇一一三)

(三)同情  
 を喚起せしむ

と罪を懺悔して悲痛を心に覚えしとき、彼は如何に罪の禍なるかを悟つたのである。人が罪に陥るは心の浮きて、情欲の狂ふ時にある。男女の情慾に關する犯罪は秋冬よりも春に多いことも理がある。心に痛切なる悲哀あるときは、人は自から罪より離れ遠かる。此點に於て悲痛は罪を矯正するのみならず、又之を豫防することにもなる。されど罪を矯正し若くは豫防せんが爲に、敢て悲痛を好んで求めよと云ふのではない。唯悲痛が避くべからずしてわが身に迫るとき、之によつて然るを得ると云ふのである。

(三)悲痛は同情を喚起さしむ。  
 眞に自から悲痛を覚えしものにして、初めて悲哀に沈める人に同情し得る。哀むものと共に哀むことが出来る(羅十二〇十五)。基督は其性質上同情を教ふる宗教である。同情の宗教である。使徒バ



ウロがコリント人に贈れる書中に左の如くすゝめて居る。

『神は我儕が諸般の患難の中に我儕を慰めたまふ。是れ我らをして神の我儕を慰めたまふ安慰を以て、又もろくの患難に在る者を慰むることを得しめんが爲なり。そはキリストの苦、われらに多くあるが如く、我儕の安慰もキリストによりて多くあればなり』(哥後一

○四一五)

之れ實に身にあらゆる艱難辛苦を受けし異邦人の大使徒が、悲痛問題に對する解答と見ることが出来る。彼の见解によれば基督信者は種々の苦を受くるども、之は無意義ではない。神はわれらに苦を遣りたまふことありども、又必ず之に添て慰をも與へたまふ。わが知友が夫に別かれて悲嘆の涙に袖をうるはせるとき、其若きとき學びし一外國女教師より送られたる慰安の書中に此聖句があつた。當

時悲哀の底に沈みて、心靜かに思ひめぐらす餘裕なかりしも、後に考へて大に意味深きを悟つた。さればよし悲や苦を身に受くることありども、之によりて、自分と同じ悲痛にあるものを、自分の経験よりして之を慰め得る。之れわれらの生涯に悲痛の取り去られざる所以である。言ひ換へれば同情を呼び起さしむる爲である。

以上は基督教の見地よりせる人世の悲痛問題の解釋と意義である。



飽くことを知らざらざるもの

第九

敬神知足

如何にして満足安住し得べき乎

神を敬ひて足ることを知るは大なる利也。われら何をも携へて世に來らず、何をも携へて往くこと能はざるは明かなり。(提前六〇六、七)

ソロモン王の箴言に『あくことを知らざるもの三あり、否四あり、皆足れりと云はず。即ち陰府、姪まざる胎、水に満たされざる地、足れりと云はざる火これなり』(箴卅〇十五、十六)とあり。印度の諺にも之とよく似たものがある。『火は如何ほど木を加ふるとも足れりとせず、太洋は如何ほど流を容れても足れりとせず、死は如何ほど

と死者ありとも足れりどせず』と。

されど是等の外に尙一つ足ることを知らざるもの、知らざらんとするものがある。それは不満足の人である。若し世に憐むべき人ありとせば、恐らく此種の人も其一に相違ない。蓋は足ることを知るは人生の安住と幸福の秘訣であるからである。

一

されば人をして足ることを知らざらしむるものは何乎と云ふに、概して他を羨むことである。富を羨み、地位を羨み、榮達を羨み、名聲を羨み、健康、美貌等を羨みて、自分も彼の如くならば、さぞ福ならんと思ふことである。

されど之れ一種の幻影に過ぎない。自分が見れば羨ましく思はるる富者にも憂多く、美貌のものには誘惑断えず。王冠は昔より屢幸

他を羨む  
ここ

紫の藤  
知足訓  
ここ

福の標象ではなかつた。人、誰にも相應の苦勞憂愁がある。されば自分が羨む地位に登り、自分の望める身分とならば、却て案外なるに相違ない。之れ古より處世には知足訓の必要なる所以である。

藤の花の美は紫房相重りて掛垂せる處にある。芽を出すときは、上を向けど、花盛とならば次第に下に垂る。之れ亦自然がわれらに示す知足訓である。然るに足ることを知らざる結果は、餌を獵する餓えたる狼の如く心に落付がない。従て幸福でない。虚榮心、嫉妬心、皆此『足るを知らず』と云ふ母の女である。時には不義不正の『犯罪行爲』と稱する畸形兒も生れて來る。

されば如何なる處世訓にても必ず此點に觸れねばならぬ。

二

基督教は此點に於て、『神を敬ひて足ることを知れ』と云ふ。此條

神を敬ひ  
て足るこ  
さを知る  
ここ

件は他の知足訓に見ざる特異の點である。之には仔細がある。

(一) 神は何時如何なる場合にも我らの最善を圖りたまふ。(二) 故に現在のわが境遇、わが事情に在りて満足する。(三) 之は神の攝理と其公正と其愛を信任せる満足である。(四) 従て瘖我慢若くは負惜の満足でなくして、眞の安住である。(五) 加之神を背後に扣へての満足ゆゑ心丈夫に、前途に望を抱き、今の境涯にありて我が最善を盡くし得る。

されど此種の知足安住は決して怠惰を意味せず、努力奮闘の精神を沮喪せしむるものでない。分に安んじて、其最善を盡すのである。袖手無爲と知足安住とは同一物ではない。不條理不必要の羨望の爲に煩勞する勿れと云ふのである。犬は猿の如くに木に登れない。蛙は鳶の如くに空を翹ることは出来ない。足ることを知ることは、自

己の境域以外に妄に手を出さぬことである。わが垣に臨める隣家の櫻は如何に艶麗なりども、之を手折らぬ心掛を云ふのである。

人が失望して自暴自棄となるは、其努力は孤立の奮闘なる故、矢盡き弓折るゝときには絶望するに至る爲である。されど『神を敬ひて足ることを知らば』決してさる憂はない。

三

基督教は又貪慾に警戒を與へて『われら何物をも携へて世に來らず、又何物をも携へて往くこと能はざるは明なり』と教ふる。何故となれば『夫れ人の生命は所蓄の饒なるに囚らざる』が故である(路十二) ○十五王も乞食も、智者も愚人も、皆等しく何物をも携へて世に來らざりしが如く、何物をも携へて往かない、往き度とも出來ない。キリストの寓話の一に、或富人倉庫に貨物を充させて、之ならば

生涯安全に暮し得んと心に悦びしに、『愚者よ、今夜汝の魂どらるゝことあるべし』と神より告げられしとある。『凡そ己の爲に財を蓄へ、神に就て富まざるものは、此の如きもので』ある。『神に就て富む』は眞の富なり。之こそ魂の永遠の富にして、死と共に朽ちず、天に貯ふる寶である。眞に『神を敬ひて足ることを知る』ものは、此不朽の富を有するものである。

四

基督教はかく知足訓を興ふるのみならず、之が完全なる模範はイエス、キリストの生涯に於て現はれてある。キリストは其地上生涯の多くを寒村ナザレに木匠として送られた。『彼は木匠にあらざるや』之果して人の羨望すべき地位なりや。况んや之れ世界萬民の救主たらんとする者の位置たるに於ては實に驚くの外はない。

萬民の救主は何故に當時の王者の如き身分に生れざりしや。また然る生涯を送らざりしや。キリストに従ひし多くの者が失望し、かつ躓きしも無理はない。世人の眼よりみれば之は一の不思議である。されどキリストはかゝる生涯にありてつぶやきしや。將他を羨みしや。聖書の答は全く是に反對である。ナザレに居り『兩親に仕へ』とある。一寒村の一木匠として兩親に孝養を盡されたのである。神が人間化して此世に来るに臨み、之れ以外の他の生涯、他の位置、他の身分を探り得ざりしわけではない。然るに特に此種の生涯を擇ばれし理由は、聖書の教ふる所に照らして概ね左の如く察せらるる。

(一) 先づ人をして知足安住の精神を抱き、如何なる境涯にありても、他を羨望するが如きことなく、満足せしめんが爲である。され

ば聖パウロも「爾曹キリストイエスの意を以て意とすべし。彼は神の體にて居りしかども、自ら其の神と匹く在るところの事を棄て難きこと、思はず、反て己を虚ふして、僕の貌をとりて人の如くなり、既に人の如き形状にて現れ、己を卑くし死に至るまで順ひ、十字架の死をさへ受くるに至れり」(腓二〇五十八)と勸めて居るのである。われら自分の身の程を忘れて徒らに他人を羨むとき、救主が地上の生涯に於て大工たりしことを思ひ起さば、自から愧づるに相違ない。われらは自分のことのみ思ひて、不如意の時に嘔くが、斯るときには、いつも神の聖子が人として此世に來給ひしときに大工たりしことを忘れて居るからである。

(二) 貧乏人の友たらんが爲である。貧乏者は富る者よりも多く我らの同情を要する、又同情に値する。然かも此貧乏者は世界人民の大

多數である。されば我らの救主が寒村の木匠たりしことは、是等多數の貧者に如何ばかりの奨励と慰藉を與ふるぞ。救主が世界一の金満家なりしとて致方はない。されど神の量るべからざる慈愛の思召によりて、救主は賤が伏屋に鉋をとり、鋸を用ひられた。あゝ之れ何たる難有勿體なきことぞ。今の人の憂は氣のみ驕りて、手足の動かぬことである。正直にわが最善を盡くして尙貧乏ならば、其貧乏は耻辱ではない。キリストが曾て木匠なりしことは、人間の足ることを知らざる虚榮心に對する最強の抗議である。

(三) 労働は耻づべき事にあらざるを明にせられた。「わが父は今に至る迄働きたまふ、われも働くなり」とキリストは仰せらる。神自らも四六時中働きて在すに、人のみ袖手隠居せんとするは何たる不量見ぞ。何たる恐縮すべき事なるぞ。今の所謂「高等遊民」に汝の救

主は此世に在し、ときは、木匠なりしと告げよ。告げて、追ひ立て、せき立て、錐にても、鍬にても、筆にても執りて直ちに働場に往かしめよ。労働輕視は人情非篤實となりし証據である。キリストも其比喩中に、僱者なしとて終日空しく立てる昔の『高等遊民』に向ひ、『汝らも葡萄園にゆきて働け、相當の工銀を得べし』と告げられて居る。キリストは實行を以て労働神聖を証せられた。

五

かく基督教は其説教に於ても、其模範に於ても、神を敬ひて足ることを教へて居る。若此精神を學び、之を日々の生涯に實行し得ば、其時より連日の陰雨晴れて、一天曇なく澄みわたれる心地となるに相違ない。

第十

「父の家の第宅」

——死及死後に就て如何に考ふべき乎——

「なんぢら心に憂ること勿れ、神を信じ又われを信すべし。我が父の家に第宅多し、然らば我豫て之を爾曹に告ぐべきなり。我なんぢらの爲に所を備に往く」  
（約十四〇一—二）  
「わが願は世を逝りて、キリストと共に居らんことなり、之れ最も美き事なり」  
（腓一〇二三）

人生問題  
中最も  
嚴肅なるもの

人生問題の中、最も眞面目なる題目は、死と死後の状態に關するものである。如何なる宗教にても、此點に就て、満足に解決を與へずば、其役目を充分に盡くせるものと云ふことは出來ない。

人は通常あまりに此問題を考へて居ない。却て避けんとする。話すことを好まない。されど如何に好まずとも、わが愛する者の逝くとき、定まりし座席にいつも見なれし姿の見えずなるとき、いつも聞き馴れし優しき聲の聴えずなるとき、いつもわが身を迎へくれし笑顔も見えずなるとき、人は此事に想到らざるを得ない。

數日前、わが身は夜九時頃、突然仙臺ホテルに滞在中なりし一知人よりの急使に接した。其人の友人が旅先にて急に心臓麻痺の爲に死し、其仕末につき助勢を頼むと云ふことであつた。行て聞けば、死せし人は彼より一日早く當地に來りしが、其家を出立するときは、健康上何らの異状なかりしに、彼が其日控訴院へ往き用を辨じて歸宿せるに、何ぞ圖らん其友人は既に死亡しあらんとは。實に人生の圖るべからざるを觀面に見て、人はいつ何處にて死ぬるか知れない、

平生の心掛は實に大切であることを、つくづく感じたこのことであつた。

かく言ひし人は或る教會の柱石である。平生宗教の事に冷淡にして、無頓着なる人にも、眼前に此の種の事件をみるに至りては、忽ち謹嚴となり、死に對する用意——死とは何乎、死後は如何になるか、略言せば如何にして安心し得るかを考へざるを得ないであらう。

人口に膾炙せる話に、或有名なる無神論者が、一友と野外を散歩せるとき、今迄晴れ亘り居たる一天、俄かにかき曇りて黒雲墨を流す如く、雷鳴盛に轟きしが、忽ち電光きらめくよと見るまに、自分の傍に在りし友人が之に打たれて即死せるを見て、思はず「あ、神よ、我をたすけ給へ」と祈つたと云ふことがある。



之は人間の真相をよく曝露せるものである。人は如何に傲慢なるも、其心底に於ては自ら助くるの力なきこと、斯くの如くである。之は作話でも何でも無い。此種の事は屢起る。過る日、仙臺市外の或田舎にて、百姓十數名が田植を爲し居たるに、雨ふり出で、雷さへ鳴り來りたれば、其内多くは歸宅せしに、數名の者のみは附近の墓地内にある假埋葬式場に立籠り居たるが、俄かに落雷ありて五人のものは黒焼となりて、悲惨の死を遂げ、僅に逃げ出せしものも、重傷を身に帯びた。人の命の圖るべからざる正に斯の如くである。世界最近の科學上の發明を應用せる世界の一大汽船、これぞ『海の征服者』ならんと誇りしタイタニツク號が、其處女航海に出でしとき、誰も大西洋上、數時間の後に、幾百人の生命が其船體と共に全く水中に葬られんと考へし者はなかつたであらう。

かゝることを聞き、かゝることを見れば如何に無頓着者にて、多少心動かされざるを得ない。人間に最も確實なることありとせばそれは死ることである。生れることは誰も知らない。されど死ぬることは皆人に定まつて居る。

有名なる英國の説教家カノン、リドンの説教の中に「用意せよ、死ぬる用意せよ。……人生に關して最も確かなる一事は、われらが何時か此世を去らねばならないことである。死と云ふ問題に關して、確かなる一事は、われらが死なねばならないことである。(一)先づ何時死ぬるか知れない。臨終の時の來るまで幾時間あるか、それも知れない。(二)如何様の死にて死ぬるか―怪我をして死ぬるか、疾病にかゝりて死ぬるか、不意の死か、或は常命を保ちて死ぬるか、それも知れない。(三)又何處で死ぬるか、我ら

らは知らない。わが家にて死ぬるか、旅先にて死ぬるか、床の上にて乎、街上にてか、汽車が衝突してか、汽船が沈没してか、それも知れない。(四)更に又如何なる事情の下に死ぬるか、われらは知らない。唯自分ひとりで誰も看病をしてくれる者なくして死ぬるか、或は友人に取圍まれて死ぬるか、七轉八倒の苦を爲して乎、それとも極めて穩かに眠るが如く死ぬるか、宗教上の信仰の慰藉を有してか、或は安心立命をして乎、それも知らない。かく死の時間も、死の場所も、死の様式も、死の事情も、一切皆われらの眼に隠されてある。されど不確實、不明瞭、不定の間において、絶對的に不可抗的に、氣味悪きはど確實なることは、われらは一人々々皆一度死なねばならないことである。聖書は之を教へ、人間の經驗も之を證明して居る。」

(一)死は神より賜はる安息

我らはかく一度は、是非死なねばならないとせば、無用意に死ぬよりも、心に充分用意ありて死ぬ方望ましく、煩悶、苦叫、未練を残して死ぬよりも、安心立命、従容として死ぬる方好ましくはあらざる乎。

通常の場合に於ても然り、されど此度は明治天皇の崩御によつて我らは日本國民として、最も痛切に且つ最も深刻に此問題に逢着した。國民の心は電氣に打たれたるが如くに、今更に此死の問題に觸れた。

二

されば基督教が如何に死を見るか、信者は如何に死に處するか。

(一)死は神より賜はる安息であるとの事。

基督教的傳記を見るときは、他の傳記に發見することの出来ない

一特徴がある。それは死のことを記すに當り、之を以て神よりの召にて安息を賜はるものと記してあることである。

去年九十一歳の高齢にて逝きし、ロンドン聖パウロ大聖堂のデー、グレゴリーの死を記すに當りても、主と其公會の爲に善戦せし主の老僕は、主より賜はる安息に値せりとの意味の言を用ひて居る。これは公會の歴史のページに、薫ばしき名を残せし神の大なる忠僕の例なれど、又實にキリストの紀元以來今日に至るまで無数のキリストの僕が取り來れる死に對する態度である。されば此安息とは何を意味する乎。

キリストは此世を去り給ふとき、死別を悲む弟子に向つて『汝ら心に憂ふる勿れ、神を信じ、亦われを信すべし、わが父の家には第宅多し、然らずばわれ豫て之を告ぐべきなり。われ汝らの爲に所を

父の家への復歸

備へに往く』(約十四〇—二)と仰せられた。

基督信者にとりては、死とは他國の旅先の如き、不見不知の場所に往くにあらずして、キリストの備へられし『父の家』に往くことである。父の家はホームである。ホームは樂のある所、喜のある所である。誰もホームに還るを厭ふものはない。勿論之は形容辭である。されど是以外に言ひ表はし様がないからである。されば聖歌第三七四にも

わがふるさこのすみかは  
よにはやすむところなし  
かみのつかひはみかぎに  
このたのしきみすまひに  
たかきうへのくになれば  
なにをかおもひわすらはん  
たちてたかくうたひつゝ  
きたれとわれをまればり

或は又第三七六に

はるかにあふぎふる

かどやきのみくに

われらもつひに かぎやくみくにして  
きよきたみこ さもにみまへにあはん

或は更に第三七七にも

われらのくには このよにあらぬ  
いさまたのしき あまつくにぞ

エスキミはやく みちゝのいへに  
すまひをそなへて まちたまふなり

とあるも皆此信仰の反響に過ぎない。

かくも死を以て『父の國』『父の家』に復歸するなりとする思想は  
基督教を除いて他に求め得ない。

之れ實に死を畏れ、死を厭ひ、死を避けんとする世人の眼に、看過

せんとするには餘りに著しき不思議なる現象である。之は世界の如何なる宗教も眞似することの出来ない基督教の特異の點である。此特異の點こそ實に基督教の有功力の存する所である。何故となれば死は人間の最も介心すべき等の問題である。此問題を満足に解決し得ば、人生の最大にして最後の問題を解決せる事となるからである。而して基督教は正に之れなりとせば、基督教を以て最上最高の宗教なりとするも、誰も否むことは出来まい。

三  
(二) 第二に注意すべきは、主に在て世を逝る者は、死後主と偕に居るとの事。

キリストを信するものには、世人よりみれば、一の奇なる現象がある。それは外ではない。人が死を厭ひ、死を避くるに反して、却

て此世を去りて主と偕に居らんと願ふことである。勿論之は此世の生涯の苦勞を厭ふ我儘なる願望の意味ではない。神より命せられたる此世の戦を戦ひ終りて安息を願ふ意味に於てである。

たとへば使徒パウロは其晩年に、ピリピ人に書き送りて曰ふ「わが願は世を逝りて、キリストと共に居らんことなり、之最も美き事なり。されどわが肉體に居るは、爾曹の爲に更に必要なり。われ深く此事を信するが故に存へて、爾曹衆の人と共に世に住み、爾曹をして信仰を益しめ、信仰より出る喜を得しむるに至らんことを知る」(腓一〇廿一―廿五)と。彼は世を去りて、キリストと偕に在ることを以て最も善き事となし、之を彼の願とすれど、此世に居ることとは、信者の爲め必要なるが故に、此世に存へて務を爲すと云ふのである。彼の考によれば、死することは、キリストに一層近寄ること

とである故益ありとする。

之によりて死後、キリストと偕にある事は明かである。之はキリストが十字架の上にて罪を悔ひたる盗人の、「汝聖國に至らんとき、われを憶えたまへ」どの訴を聞きいれ、「けふ汝われと偕にパラダイスに在るべし」と仰せられたこと、符合して居る。

新葬書埋葬式の祈にも

『全能の神よ、主に在りて世を逝るもの、靈、主と偕に居りて生き存へ、主を信する人の靈魂、肉の重負を脱すのち、主と俱に居りて樂む』(二七六頁)

とあると同様の信仰より出で來れる思想である。

されば、未來の生活状態に就ては、よし聖書に明確なる教説なしとするも、此一事は明白である。即ち死後われらはキリストと偕に

居ることである。キリストと偕に居る。之れに勝れる福はない。さればこそ使徒パウロは、之を以て最も善き事となしたのである。

(三)個性の永續

(三)個性の永續を信ずる事。

墳墓がわれらの個性の最後なる乎。此世の後にも我らの人格は永く存続する能はざる乎。曾て此世に生き存へしものが、一旦墳墓に埋められてのち、再び此世に顯はれ來りし者なきは事實である。わが親しめる者、我が愛くしめる者が、一旦死の使に携へ去られて後は、其後の音信を斷えて受けしことなきも事實である。

かくて之を理由として、浮世を頗る輕薄なる調子にて涉り、食へよ、飲めよ、樂しめよ、われらの生命は此世限りぞ、此短き生涯に何を苦んで謹嚴ならんとするぞ。眞面目ならんとするぞ。次の世あ

此信仰の現生

り、後の生命ありなぞとは痴人の夢語なりとする、自暴自棄の享樂主義を取る者のあるも眞である。されど之は果して然る乎。われらの個性は單に此世限にて亡せ去るものなりや。われらが最後の呼吸を引取るとき、われらの骸が土に委し去らるゝとき、其の時よりして『われ』此の我が『個性』は永へに此宇宙より亡せ去るべきや。若し然りとせば、之れ果して我らの強き个性的存在の要求を満足せしむるものなるべき乎。

單に普通の人情よりするも、かゝる觀念は、われらの心の拒み厭ふ所のものである。暫く理論や、證明を別としても、未來生なしと云ふと、之れありと云ふと、いづれか人の望を満足せしむべき。

若此世にて我が愛せしものが、遂にわれに先ちて去るとき、或はわが身先づ我が愛する者に先ちて去るとき、其別れは永遠の離別に

墳墓は人生の終結にあらす

して、墳墓の彼方の何處にも、如何様にも、再び相知り、相愛するの機なしとせば、死は此世に於て厭ふべきものなく、恐るべきものなく、また忌むべきものなく、從て墳墓は、われらの恨、われらの嘆、われらの悲の表號となるに相違ない。されど、我らは然か思はず、少なくとも基督信者はしか信せず。われらの個性が肉體の生命の斷ゆると共に、斷え終るべしとは信じない。われらは我らの個性は永存すべきものなりと信ずる。墳墓は人間存在の終結にあらず。ヨルダン河を涉りて、カナンの在るが如く、此世の生存の後に次世の生存ありと信ずる。死とは恰も街を往く人が、辻を曲りしと異なる。其影見えざるが故に、其人亡せしにあらず、他の方向を歩みつゝあると同様である。

加之、我らの求むる所は此世にて保らし我愛する者との交通を死

後にも連續することである。されど交通とは人格との關係を意味する。故に交通の連續とは、人格の連續ありて初めて可能となるものである。されば此人情の至願が満足せしめらるゝ爲には、此世にて知り、此世にて愛せし其者の人格と、我ら自身の人格と共に不滅のものでなければならぬ。從て人格不滅を認めざる宗教は、此點に於て最も重大なる欠陥がある。佛教は其汎神論の信仰よりして之を認めない。されど基督教は徹頭徹尾『人格不滅の宗教』である。されば其證據は何處にありやと云へば、之れ當に『われは復活なり、生命なり』と仰せられしのみならず、自から死より復活し給ひし主イエス、キリストの復活にありとす。さればこそ聖パウロはコリント人に書き送りし書に證言して曰ふ『キリストもし甦らざりしならば、我らの宣ふるところ徒然、また爾曹の信仰もひなしからん』(哥

前十五〇十四)と云ふて居るのである。之れ實に基督教の福音である。古のキリストの使徒らが、死を賭して説きし福音である。之れ亦基督教が諸宗教中特異無比の宗教たる所以である。

五

(四)身體の復活を信する事。

されど基督教は漠然として『靈性不滅』『人格不滅』を唱ふるものではない。其信經に於て『身體の復活を信す』と告白する。之れ實に人間の人格連續に關する最上の信仰である。我らと我らの愛するものが、此世にて保ちたりし個性は、死と共に廢絶するものにあらずして、此世に於ける『肉の重負を脱す』のち、より善き状態に於て個性の交通を續け、時至りて一種高等の靈體に復活するのである。勿論此「靈體」とは如何なる性質のものなる乎、今の我らには明かに

(四)身體の復活

高等靈體の復活

知れない。されど此世の身體よりは遙に高等にして、靈の完全なる機關となることを、キリストの復活體によりて察し得る。之は迷信にあらず、空想にもあらずる事は、キリストの復活に於て保証せられて居る。キリストは『代表的の人』として復活せられた。キリストは贖罪の死に於て人類の代表者なりしが如く、其復活に於ても人類の代表者である。されば此代表的のキリストが復活せざりしならば、われら人類の死後の個性の存續に關して望なきものとなるべし。されど主はイースターの曉に墓より甦りたまふた。之れ我れらもやがて同じく甦るべきを示されしものにして、また其證據である。

其保證

さればキリストの復活は、われらの復活の前型である。此事實の上には我らの未來の希望が最も安全に置かれてある。

此觀念は基督教の墓地に到りみれば、極めて著しく判かる。『主曰

基督教の墓地



く我は復活なり生命なり、われを信するものは死ぬるとも生べし、  
 『主よ、わが望は汝にあり』などの希望と光明に充てる聖語が墓標  
 に記されてある。之を佛教の墓地に到りて卒塔婆に記されたる『生  
 者必滅』等の希望なき暗黒なる文字と對照せよ。其懸隔果して如何  
 に。前者を訪ねて寂しき感は生せぬ。後者に足一たび履み入れば、  
 一種の陰氣なる淋さに打たれざるは稀である。基督教國にては、墓  
 地を成るべく美しくするも之が爲である。伊太利ゼノアの『カンポ、  
 サントー』などは其有名なるものである。

六

斯の如く基督教は、死及び死後の問題を觀る。未來狀態に關する神  
 學的細論に立ち入らずとも(一)死は神が其全き愛と、其全き智と靈  
 理によりて、適時にわれらを召して、安息に入れ給ふことである。

死及死後  
 に關する  
 四要點

(二)死後は此世の試鍊誘惑より一切離れて、キリストと偕なる最も  
 善き状態に入る。(三)此状態に於ては、個性は滅却せられず、其意  
 識を保つこと。(四)『終の日』に身體は高等の靈體に復活すること。  
 聖書の默示は主として、人が此世に於ける状態に就いて教へしもの  
 の故、死後のことは明白に示されて居ない。されど『主に在りて世  
 を逝る』ものをして安心して去り得べきだけの光明は、此問題に投  
 せられてある。即ち以上の四の點である。此四の點にして明かなら  
 ば、我に死は何時迫り來るとも狼狽することなく、使徒保羅の如く、  
 生くるも、死ぬるも、主の愛の攝理に任せて安んずるとが出来る。  
 之は單にわが身一個の説ではない。實に公會が二千年來信じ且つ教  
 へ來りし所、又今日迄無數の基督教者をして、安心と希望を以て此  
 世を去らしめし信仰である。

死及死後  
に關する  
解釋と現  
生活

元來死に關する問題は死後に關するのみでない。其觀念如何は、現世に其影を投ずるものである。若し悲觀的、無希望的ならば、此世に於ける生活も引立たず、無元氣となる。されど若し希望的に、有來世的なりとせば、現生に於ける生活にも同様の反影を投ずる。もし少年青年等血氣旺盛なる時代に然らずとせば、確かに人生の終焉に近づきし老年に於て特に之を感ずる。况んや、死は何時、如何にして、何處にわれらに迫るやも知れざるに於てをや。

死は人を待たない。基督教の福音若し此の點に於て諸子に訴ふる所ありとせば、之を受認するに於て何の躊躇する所かある。

### 人生の照暗燈 終

大正二年十二月廿五日印刷  
大正二年十二月三十日發行



著者 仙臺市元鍛冶町八番地 稻垣陽一郎

發行者 神戸市下山手通五丁目十五番地 ヒユ、ゼ、フラス

印刷者 神戸市吾妻通三丁目十七番屋敷 菅間徳次郎

發行所 神戸市中山手通三丁目五番地 日本聖公會出版社

印刷所 神戸市吾妻通三丁目十七番屋敷 福音印刷合資會社神戸支店

# ▲廣告▼

## ●新神學と舊宗教

菊版總  
クロース

定價 金六拾五錢  
郵稅 金八錢

監督ゴア著 長老 稻垣陽一郎譯  
カムベル氏の新神學なる運動は實に久しく伏在せる思潮の或傾向を捕へて論壇に提供せるものなり。之に對する原來の基督教は如何なる位置にあるべきや。本書はゴア監督が其教區の大聖堂にて該問題に對して説かれたる講演なり。本講演の出版せらるゝや、チャーチタイムスは「我等の當に聞かんとする所を最も聽かんと欲する人より聽くを得たり」と云へり。我國にありても本問題は亦多くの人の聽かんと欲する所にして而も譯筆亦之に適へり敢て一本を座右に薦む。

博士イリソグウオース著 長老小林彦五郎譯

## ●基督教徒之品性

訂正改版  
四六版總クロース

定價 金五拾錢  
郵稅 金六錢

品性を説くは近代の一流行なり。儒教的品性を説くものあり、武士道の品性を高調するものあり。而して吾人クリスチャンには千九百年來傳へ來れる一種の品性あり。其の品性とは如何なるものぞ。是れ本書の現はれたる所以なり。著者は英國第一流の思想家なり。譯者亦敬虔なる教育家なり。未だ基督教品性の何たるを知らざるものは本書によりて之を研めよ、既に知る人は取て以て反省の料とせよ。

## ●基督教人物考

長老山縣雄杜三譯  
菊版半裁

定價 並製 金貳拾五錢  
上製 金參拾五錢  
郵稅 金六錢

本書は辨證的に基督の人格を研究せしむるものにして其の目的とする所は、今基督は何であるかとの間に答へんとするにあらず、遡つて其出現當時の基督は神なりしやとの疑問に答ふるにあり。議論の穩健なると、譯筆の平易流暢なるとは相待つて讀者をして基督の人格に就ての疑問を氷解せしむ。

## ●宗教大王の使者

ライトペーパー  
四六版石版摺表紙

定價 金貳拾五錢  
郵稅 金四錢

比喩譚中最も興味あり、且つクリスチャンの處世上に最も深大なる教訓を與ふるものは蓋し本書に如くものなかるべし。社會の狀態が滔々として利己倒他に傾きつゝある今日、本書の出づるは實に此の缺陷を救済するの使命を帯ぶるものと云ふべきか。希くは本書によりて世の虚榮と空名を糞土の如く棄て天に寶を蓄ふるの喜びを味はれんことを。

## ●聖書の由來

古昔寫本  
寫眞繪挿入

定價 並製 金參拾五錢  
上製 金四拾五錢  
郵稅 金四錢

天來の至寶なる聖書は如何なる沿革を経て現今吾人の手にするを得るに至りしか、其の來歴を平易且興味ある記述法を用ひて説けるもの、一度巻を繕けば趣味津々又巻を掩ふの邊なし。原書の始めて出版せらるゝや、忽ちにして十數版を重ね數萬部を賣盡せりと云ふ。亦以て如何に好評を博せしかを知るべし。

エ、シ、ゼ、ホーン女史著

# ● 俗通 預言書の研究

四六版二七六頁  
背クローヌ本綴

定價 金六拾錢  
郵税 金六拾錢

本書は僅に四十課にて大小十六の預言者の人物、性行、教訓等を面白く研究せしむる指針にして、曩に英國にて出版せられたる頗る好評を博し、有名なる斯學の大家シンカー博士によりて一般基督教界に推薦せられたるものなり。著者は現に九州地方に宣教し、其實際の経験に基づきて日本人の需要に適合せしむるやう自ら幾多の變更を加へられたれば、普通の譯書と類を異にす。冀くば基督教の諸學校及家庭に於て聖書教授の参考書として、本書を使用せられんことを。

博士アル、エル、オットレ著 岩井順一譯

# ● イスラエルの宗教史

(近刊)

神戸市中山手通三丁目外五番

## 發賣元

## 日本聖公會出版社

振替大阪九一〇九

本社出版物  
販賣店

東京 教文館

大阪 福音社

京都 同信房

神戸 福音舎

270
59

終